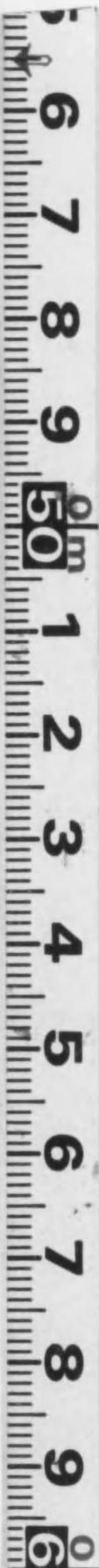


獨習
上達 將棋新手ほどこき

全

特257

232



始



特257
232

八段土居市太郎校閱
將棋新報社編輯局編

獨習
上達
將棋新手ほとぎ

東京 文祥堂發行





古代將棋合手圖

目次

(一)	次	目	
		○ 将棋の傳來と指し方	一
		○ 将棋は如何にせば早く強くなれるか	一三
		○ 将棋は強きが樂みか弱きが樂みか	一八
		○ 将棋の本筋は如何にして學ぶべきか	二〇
		○ 師匠と書籍の選擇	二二
		○ 研究資料に供すべき書籍	二三
		○ 研究の順序	二五
		○ 定跡の効果と駒引きの割り合	二九
		○ 定跡を習つて弱くなつたと云ふ人の誤解	三三
		○ 将棋の規定	三四
盤と駒	禁手	(二歩、生歩、	三四
			三五
		○ 術語	三七
		○ 待つたは上達の妨げ	三九
		○ 一日に多く指さぬ事	三九
		○ 早く指さぬ事	四〇
		○ 駒を手握る勿れ	四二
		○ 對局の禮	四三
		○ 定跡の種類	四五
		○ 定跡は何から研究すべきか	四七
		○ 局面の分折	五七
		配陣即ち定跡 接戦即ち分れ	
		肉薄即ち寄せ 終局即ち詰め	
		○ 勝局の要意	五九
		勝つて兜の緒を締める	
		必死實例と解釋	
		○ 輕卒なること勿れ詰むか詰まぬか	六六

突つく 歩あしに限かぎる
 跳はねる 桂けいるに限かぎる
 直すぐ まつすぐに上ある事こと、金銀きんぎんの類るい
 寄よる 横よこに寄よること
 引ひく 後あとへ下さること
 戻もる 始はじめに居かた處ところへ、飛車ひしやなど
 廻まる 横よこに廻まること飛車ひしやに限かぎる
 上のる 上うへ登のる金銀きんぎんの類るい、但たし直ちくと
 成なる は違ちがつて筋違すぢちがへの時ときもある
 敵陣てきじんへ入いり駒こまを返かへす

將棋術語

走はる 香車きやうしやの類るい
 取とる 敵てきの駒こまを取とること
 持ち 勝負しょうぶなし
 指さし切きる まだ我わが方ほうの詰つみには手數てかず
 間駒あひこま あるも敵てきを攻せめる手しゅ段だんが盡つきて
 駒こまを投なげる場ばい合あひ
 間駒あひこま 飛ひ、角かくに玉手たまてを懸かけられた時とき、
 之これを遮さるために打うち込こむ駒こま
 浮うく 飛車ひしやの上うへ出でる事こと
 振ふる 飛車ひしやの横よこへ廻まる類るい

○成らすの妙手……………七二
 ○詰手の實例……………七五
 ○定跡通例……………八四
 六枚落より平手まで
 ○素人好きの指し方……………一〇五
 ○實戦の實例……………一二一
 ○駒の運用法……………一三八
 ○入り玉の話……………一三九
 ○黒人と素人の指しぶり……………一四三
 ○駒組秘訣二十種……………一四七
 ●平手四間飛車受方……………一四七
 ●同断別手段……………一四八
 ●平手兩居飛車……………一四九
 ●平手美濃受け……………一五〇
 ●平手後手美濃……………一五〇
 ●平手本受け……………一五一

目次終

●平手卯智流……………一五三
 ●平手向ひ四間……………一五三
 ●平手向飛車受け……………一五三
 ●互四間左右廻り……………一五四
 ●平手後手五一やつし……………一五五
 ●平手右四間受け……………一五六
 ●平手向ひ四間裏止……………一五七
 ●同上受け……………一五八
 ●平手宗看流……………一五八
 ●平手相懸變則……………一五九
 ●平手相懸金付受……………一六〇
 ●平手筑深流……………一六〇
 ●平手三二金付……………一六〇
 ●平手後手よし……………一六一

獨習將棋新手ほどき

八段 土居市太郎校閱

將棋新報社編纂

將棋の傳來と指し方

將棋の起源につきては色々の説がありますが先づ印度で作られ、西は西洋、東は支那を経て日本に傳はつたと申されます、此中で西洋へ傳はつたものは大抵昔のまゝで進歩が少くないやうでありますが支那から日本へ傳つたものは非常に進歩して今日の如きものに至つたのであります、而して支那から日本に傳つた將棋には大將棋、中將棋と云ふものがありました之を著しく改正進歩させたのが小將棋と云つて今の將棋であります、尤も大將棋が支那から來たものと云ふには少し疑ひがありますが議論は畧し

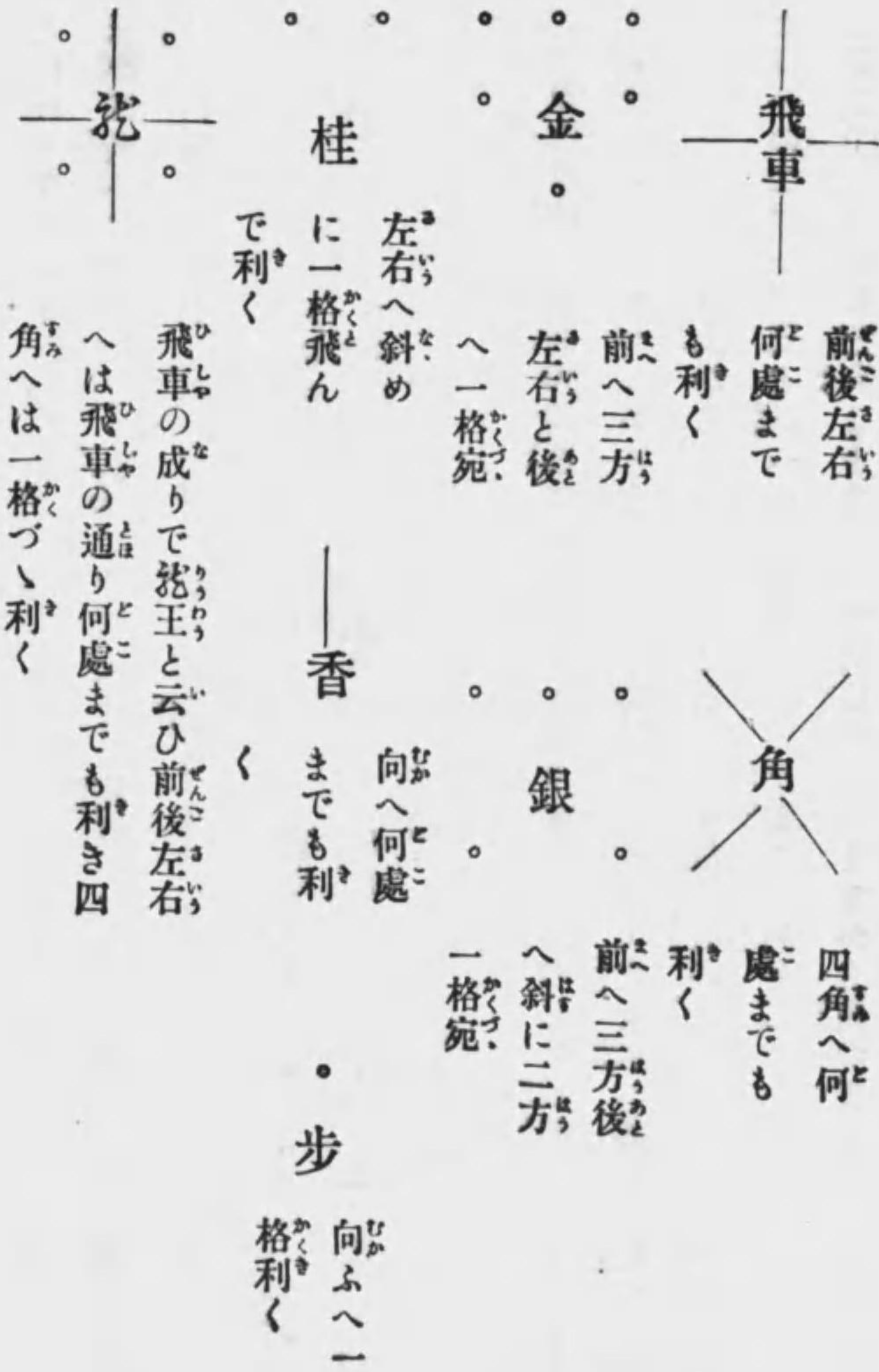
棋子符合
 龍 又は 牝
 龍王の略にて飛車のナリ也
 馬 又は 馬
 龍馬の略にて角行のナリ也
 金 銀のナリ也
 金 桂のナリ也
 金 香のナリ也
 歩のナリ也

盤面圖解

九ノ一	八ノ一	七ノ一	六ノ一	五ノ一	四ノ一	三ノ一	二ノ一	一ノ一
九ノ二	八ノ二	七ノ二	六ノ二	五ノ二	四ノ二	三ノ二	二ノ二	一ノ二
九ノ三	八ノ三	七ノ三	六ノ三	五ノ三	四ノ三	三ノ三	二ノ三	一ノ三
九ノ四	八ノ四	七ノ四	六ノ四	五ノ四	四ノ四	三ノ四	二ノ四	一ノ四
九ノ五	八ノ五	七ノ五	六ノ五	五ノ五	四ノ五	三ノ五	二ノ五	一ノ五
九ノ六	八ノ六	七ノ六	六ノ六	五ノ六	四ノ六	三ノ六	二ノ六	一ノ六
九ノ七	八ノ七	七ノ七	六ノ七	五ノ七	四ノ七	三ノ七	二ノ七	一ノ七
九ノ八	八ノ八	七ノ八	六ノ八	五ノ八	四ノ八	三ノ八	二ノ八	一ノ八
九ノ九	八ノ九	七ノ九	六ノ九	五ノ九	四ノ九	三ノ九	二ノ九	一ノ九

まして中將棋は支那から傳來したものと思はれまして中古は此中將棋ばかり指して居たのであります、然るに今より凡そ四百年ばかり以前に如何なる大才子が改正したものであつたか現今の小將棋が顯はれてまゐりましたが、之れは中將棋より變化させたものと云ひまして當初には玉將の左右の上に醉象と云ふ駒があつたのでありましたが之れが邪魔になつて變化に乏しいと云ふので一條禪閣が此駒を除いて一層巧妙にしたのだと申します、此醉象と云ふ駒は中將棋に残つて居りまして東京には指す人がありませんが京阪には今も指す人がありまして木見八段などは中々強いやうであります。大將棋も中將棋も西洋將棋も支那將棋も駒は取り捨て且つ敵地に入つて成ると云ふことがありませんから手數も少く變化も乏しく之を今の日本の將棋に比較いたしますと甚だしく趣味の薄いものであります、然るに今の日本將棋は變化百端、打つ、取る、又打つ、成る、成らぬと云つたやうに無盡藏の指し方が備つて一たび之れが趣味を解すると如何なる遊技も及ばぬと云つたやうな妙境へ進んで居ります。

扱此たび始めて此將棋を習ふと云ふ人より順次に有段にまで誘ひ進めるために一つの「將棋手解書」を編輯してくれよと書肆文祥堂主人の依頼により此に此書を編纂するに至つたのであります、なまじひに下手に固つたよりも未だ駒の並べ方も知らぬと云ふ程の人より誘ひ進めた方が却つて本筋に入り易いと云ふので既に將棋の幾分を知つた人には無用であります、順序として駒の並べ方から記す事に致しました。將棋は昔は象戲と書きましたが何時か日本で將棋と改めたのであります、之れは駒を將校に比してあるからであります、其實は象戲の字が正しいかも知れません。駒は四十個ありまして玉、金、銀、桂、香と云つた様に寶物の字を頭へつけ之れに將の字を添へたのであります、故に王様と云ふのは實は玉將で金銀の上に立つ寶物であります、今でも正しき駒は双方とも玉將としてあります、誰かは知らず天に二王なしと云つて一方を玉の字に改め強ひ方が王を持つなど、云ふ俗説を出しましたが之れは玉、金、銀と云ふ寶物の名であると云ふことを知らずに云ひ出した説で双方とも玉



將が正しいのであります。
次に並べかたは圖の通りで駒の利き道も圖の通りであります但し手前を先手とし向ふ
を敵陣とします

九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇	將	將	王	將	將	將	將	皇
	飛						馬	
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
	角						飛	
香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香

又駒の中で玉將と金將を除く外は敵陣即ち
向ふの三段目に入りますと駒を裏かへして
「成る」と申しまして利き道が強くなります尤
も味方の都合では成らずともよろしいのであ
りまして之れは末に「成らずの實例」と云ふの
がありますから参考を願ひます。

玉
八方へ
一格宛
利く

角の成りで控馬と
 云ひ四角へは角の
 通り何處までも利

き前後左右
 へは一格づ
 ぶ利く

銀の成りで金
 將となり其利
 道金に同じ



桂の成り
 香車の成り
 歩の成り

金
 で金に同
 同

金
 りで金に
 同

金
 と
 同

金
 で金に同
 同

盤面の符牒 盤面の符牒は卷首に出て居りますが念のため説明いたしますと、盤面は縦横ともに九格づゝありますから(九九)八十一格で之を數へるには向つて右から左へ一二三と數へ又上から下へ一二三と數へます故に右の上の隅か一の一で、それより下へ一の二、一の三と數へ一の九で了り、又第二の列を二ノ一、二ノ二、二の三と數へ二の九で了り次に三列より九列まで同様に數へますから向つて左の上の隅が九の一

で一番の下が九の九となります因て七六歩と云ふと七筋の六へ駒を持つて行くのであります、又同と云ふのは敵の駒を取ることになります、駒の並べ方と利き道がお分りになりましたらば之れから指し方をお話しいたします、先づ先手から四七六歩と角道を明けるのは定法であります後手も三四歩と角路を明ける、將棋の指し方は千萬無量でありまして必ずしも角路を明けるとは定りませんが十中の八九は角路を明けます、此手は第一に敵陣へ利くからであります此事は後に詳しく申述べます、此で先手は居飛車と云つて飛車を元のまゝに置く指し方で二六歩と飛車先の歩を突く次に後手も八四歩と突けば相懸りと云ふ駒組となりますが此には後手は敵を受けて指すと云ふ趣意を以て四四歩と角路を止めて此四筋へ飛車を廻して来て四間飛車と云ふ駒組に指す含みを致します先手二五歩と益々飛車先の歩を進める後手は三三角と上るのは先手に二四歩と突かれ同歩、同飛と指されると敵の飛車先が通つた上に歩を一つ手に持たれて先手に指し能くされまますから此二四歩と突か

せぬ爲めに斯の如く三三へ角を上つたのであります次に先手(四八銀は敵より何時早や仕懸に攻めて来て五七、四七、三七の地位を守り又玉將の守りにする良き手である次に後手(三二銀と上るのは敵の飛車先きを受ける含みであります先手(五六歩と突くのは敵の角が五五の中央陣地を占領するのを防ぎ且つ五七へ銀を上つて追々繰り出す含みである、又敵が若し五四歩と受けて指さずに居たらば五五歩と突ひて中央の位を占めんと之意であります後手敵に中央の位を占めさせぬため(五四歩と受ける(五八金右と上る之れも四七、五七を固め且つ玉將を守るの手である(四二飛は即ち四間に廻つたのである(三六歩は桂を上つて行くためと此歩を進めて敵角を追ふためである後手は受ける趣意で未だ接戦には早いから(六二玉と上り玉を追々と安全の地に圍はんと致します(六八玉(七二玉(七八玉と寄るのは互ひに玉將を圍ふのであります、之れは中央に玉將が居ては左右何れに激戦が始まつても危険が早く近づくから一方の攻め難い處へ圍ふので何れの將棋でも大抵玉將は左右何れへか圍ふのが例であ

ります次に後手方は今一格右へ八二玉と寄つて居たいのですが何分五三の處が手薄だから先づ(六二銀と上つて何時でも五三を守る準備をする、先手玉將を左へ圍つたから萬一中央より攻め込まれた時に玉の逃げ路を廣くするためと場合によりては端より敵玉を攻めるために(六一歩と突く後手も(一四歩と受けて同じ意味に指します(九六歩(九四歩と受けるは互ひの位取りであります(二六飛と出るのは飛車を中段に据へて上下左右へ働かせんとする含みです此で後手は急ぐ手もありませんから(八二玉と寄つて此に玉將の居城を定める(三七桂は前に云つたやうに此處に上り居て機を見て四五へ飛び敵の三三と五三の位地を攻める準備であります(七二金と上つて玉の守りをつける(五七銀は段々くり上つて我飛車先きを助けて逆に敵の飛車先を攻めんとする含みであります此時後手方は敵に逆寄せられて四筋へ位取られては損でありますから(四五歩と突ひて飛車先より攻進旁々角の道を開きます、此場合後手方は最早や玉將の圍ひもつき且つ角を取り替へても我方へは打ち込まれる恐れが無く敵に向つて

二八の舊地位に引ひて居たのでは敵の角筋へ當るから豫め之を避けたのであります。三五歩(先)二六飛は桂頭の防ぎである。四三銀(先)二四歩(先)三六歩(先)同飛(先)二四歩(先)四五桂(先)三二飛(先)同成る。同銀で形勢は双方似て居りますが此後に後手方より仕懸けの手が多く稍や指しよい形であります。

次に第二の先手から三五歩と挑戦する手順を申述べますと圖面の場合即ち後手の六五歩の時に先手(先)三五歩と突く之れは敵角に四四へ出られて飛車に當るのを豫防の爲めと二つには飛車の横道を通したのであります。後手(先)同歩と取る此時先手に又二つの手があります。第一は六八銀と上る手と第二は四六歩と指すの二つであります。先づ(先)六八銀と上つて見ます。四四飛と浮き三四へ寄つて敵の桂頭を攻める手段を致す(先)四六歩(先)三四飛(先)四五歩(先)三六歩(先)四六銀(先)三七歩(先)なる桂を取る(先)三五歩(先)と打つて先手の利益の形であります。此時後手(先)四二桂打(先)三六歩(先)と飛車を取つても(先)同桂と上り飛車を二九へ逃げれば(先)四六桂で銀を取りつゝ、金に當り且つ成歩即ちと金が出來て居

ますから却て後手が指しよいやうであります。又第二の後手の三五歩、同歩に對し先手(先)四六歩と指して見ますと(先)同歩(先)同銀(先)六五歩(先)同歩(先)八八角なる(先)同銀(先)三六歩(先)同飛(先)二七角打(先)二六飛(先)三六歩打で先手が二七飛と角を取れば(先)六四飛と銀を取り(先)四七歩(先)三七歩成るで先手が損であります。又後手の三六歩打の時に先手角を取らず四五桂と飛んで敵の飛車先を防ひても後手三七歩なる(先)三三歩(先)同桂(先)同桂なる(先)同銀(先)六六角打(先)三六角なるで後手は却て先手々々となつて指しよいのであります。將棋の攻め合ひは先づ斯くの如きものと御承知ありたいのであります。

將棋は如何にせば早く強くなるか

將棋は入り易くして學び難く圍碁は入り難くして學び易しと云ふ諺があります。將棋だからと云つて入り易いと云ふ譯も無く圍碁だからと云つて學び易いと云ふ譯もなく、將棋でも本筋に入るには容易のものでなく、圍碁だからと云つて本筋を學ぶには

容易のものでなく、何れにしても上手に成らう、強くならうと云ふには順序を以て熱心に研究して行かなくては目的を達することは出来ぬのであります、然しながら將棋の方は道具も手軽であり、指し方を知つて居る人も澤山ありますので何れの處にも普及して子供の時から見覚え、指し習ふと云ふ人が多くありますので、成長の後にも友人の家や出先などで之を指して見る機会が多き場合があるやうであります、假令は圍碁の道具のある家が十家に一家あれば將棋盤のある家は十家に三四家はありませう之れがために將棋を指し覚える人が圍碁に比して割合の多き比例となりますので、誰となく將棋は入り易いと云つたのでありませうが、之れは其指し習ふ場合を云つたもので其術の入り易いと云ふ譯ではありますまい、若し西洋人などに始めて稽古させたらば圍碁よりも將棋の方が却つて覚え悪いかも知れませんが、圍碁は並べた石は何時までも動かずに居り、取つた石を再び打つと云ふことがありませんが、將棋の方は一手一手に駒が動き又取つた駒を幾度も打つのでありますから中々複雑して入り易いと云

ふ譯に行かぬだらうと思ひます、然るに將棋は日本では前記の如く津々浦々に行き渡つて子供の時から見慣れて居りますので日本人には入り易い感じがあるのであります。それは扱置き愈々將棋を指して見ると云ふ場合になると誰でも或る處までは覺えますが其一定の地平線に達すると其上に出ることが出来ず、何百番指しても何年指しても同じ程度に止つて、所謂策將棋と云ふことを免れぬのであります、尤も萬人に一人位は自然に群を抜くほどの天才が顯はれますが之れは後年に商賣人即ち將棋指しにならうと云ふ天分を以て生れた人で比例にはなりませんので、萬人の中の九千九百九十人までは何時まで指しても策將棋を免れぬものであります。之れ等の連中は十人が十人大抵同じ程度でありまして中飛車か棒銀か殆んど一定した指し方をやつて居ります、勿論始めには多少強い人と弱い人がありますが一年も指して居る間に強い方は地平線に止り弱い方が其地平線まで進んで行つて終ひに同じやう

な將棋になつて十人が十人、頭を並べて押し合つて居るのであります、之れが素人將棋の第一線でありまして、次に第二線があります、之れは其第一線の連中の一人でも二人でも或る場合に時々は商賣人の將棋を見たり、初段位の人に指してもらひなどして多少とも中飛車や棒銀以外の指し方を覺えた人でありまして、之を素人仲間では強い方として尊敬するのであります但其程度が先づ初段に二枚落ちと云ひたいが二枚落ちは六ヶ敷くらゐの力の人で本初段には四枚以下であります、次に又第三線があります之れは更らに又一步を進んで多少とも定跡の書籍などを見覺えて素人仲間へ入れれば先生株で通る人でありまして、將棋會所などを出して居て動もすると初段位の力があるだらうなどと噂されますが其實は本初段には矢張り二枚を落される程度であります故に素人將棋を三階級に分ちまして第一の強よ手を本初段に二枚落ちとし第二の強よ手を第一の人より飛車落ち位として第三の連中は又第二の人より角落位の處と致しませ、斯して第一より第三までは誰でも進んで行くことが出来るのであります世間に

多く將棋を指して居る素人に對しては之を標準として手合すれば大した間違はありません、故に若し此に某甲があつて一ヶ月に三四回は商賣人に就て稽古し又は定跡の書籍に就て秩序的に研究したと致しますと、前記の三階級の素人將棋に對しては、行きなりと大駒を引ひても負けるやうなことはありません、恐らくは二枚を引ひても大丈夫であります、萬一其中で某甲に勝てる人は第三線の人だけで其以下の第二、第一の線に居る人ならば大抵は二枚を引ひて宜しいのであります。斯くの如く強弱の相違があると云ふのは外ではありませんで一方は素人同志で我流無法にのみ指して居る將棋の本筋と云ふことを知らぬためであり、一方は多少でも師匠や書籍に就て本筋を學んだからの相違でありまして將棋を指す位ならば素人同志で十年指すよりも師匠又は書籍に就て一年習ふのが上達の早や路であります。結論 將棋は如何にせば早く強くなるかと云ふ問題に對しては師匠若しくは書籍に就て本筋を學べと云ふのに歸着するのであります。

將棋は強きが樂みか弱きが樂みか

將棋の連中が將棋を指して居る處を見ると一時間に三四番も指し其間に互ひに無駄口を云つたり強よがりやを云つたり、鼻唄を呻りなどして如何にも樂しさうである、而して其人の云ふ處を聞くと將棋は強くなると一時間も二時間も考へ一日に一番指したり二日で一歩指したりして居るが、あれでは樂みよりも苦みだらう、それよりも我々のやうに一時間に三四番も指した方が頭を痛めないで樂であるといひますが之れは全く負け惜みで其實は勝てば喜び負ければ口惜がり頭からは湯水を出し目は眩み心は顛倒して飛車取り王手を懸けられて飛車を逃げたり二歩を打たれて氣がつかなくなつたり夢中で駒を動かすだけのことで眞の將棋の樂みと云ふことは少しも味ふことが出来ませぬ、之れならば將棋を指さぬ方がよろしいのであるが、それでも指さうと云ふのは指して勝ちたいからであります、又仲間中で強くなりたいと思ふからであります、然る

に其勝つべき手段、強くなるべき道を行かずに何時までも盲目が一つ道を迷つて居るやうに只まご／＼して居ては到底目的の地に達することが出来ずに何年たつても團栗の脊比で了るのであります、將棋の眞の樂みは其云ふ淺薄なものではありません、第一は次第に強くなつて仲間から抜け出して駒を引くやうになるのが人の知らぬ樂みであります、又一番の中にも妙手を指したとか巧みに敵を詰めたと云つて後で其手を考へても滋味津津とした處に其の樂があるのであります、夢中で指して居て何な手で勝つたか負けたかも分らぬやうでは何の樂みもありません、況して何番指しても負けて計り居て終ひには始めに此方から駒を引いた人に反對に駒を引かれるやうになつては樂みなどは少しもなく寧ろ苦痛であつて夜も眠られず口惜い程のものであります、然らば將棋の樂みは弱いよりも強いのに在ること勿論でありまして、弱い方が樂みだと云ふのは全くの負け惜みに過ぎませんのであります。

結論 將棋は強きが樂みか弱きが樂みかと云ふ問題は勿論強きが樂みで其強くなる

には師匠又は書籍に就て本筋を學ぶのに歸着するのであります。

將棋の本筋は如何にして學ぶべきか

將棋を指して居ても只素人仲間のみで指して居る人は將棋と云ふものは斯云ふものかと思つて居ますが將棋には素人の知らぬ本筋と云ふものがあるのであります、故に之れまで素人仲間のみで指して居た人が始めて師匠に就て稽古するとか書籍に就て研究して見る場合に至りますと、さながら夢の覺めたやうであつて成る程將棋と云ふものは斯云ふものかと云ふ一道の光明が差て參りました之れまで指して居たのが馬鹿々々しくも耻かしくなるのであります、然れば其一道の光明の差したと云ふのが本筋の入り口で、それより次第々々に夜の明けて行くやうに筋道が明るくなつて行くのであります、譬へば之まで地圖を持たずに知らぬ地に迷つて居たのが始めて地圖を手にして目的の地に進んで行くやうな心持ちがするのであります。

結論 將棋の本筋に入るには師匠に就くか書籍で研究するかに在りと云ふに歸着致しますので此二つの方法を棄ては何時まで指して居ても闇の中に迷つて居るのであります。

師匠と書籍の選擇

師匠に就て學ぶと書籍に就て學ぶと何れが利かと申しますと双方を兼ねて學ぶのが利であるかと答ゆる外はありません、然し師匠を腰づけにして毎日稽古が出来るやうな幸福の人は師匠に就た丈で強くなるには相違ありませんが師匠と云ふものが、何時も腰づけと云ふ譯にはまわりません、故に一日師匠に就て學んだら三日書籍に就て研究し其書籍に就て解決に迷つた時に師匠に就て質問すると云ふ事にしたならば充分であります、書籍には本筋を書いてありまして之を見る人の力に依つて解決に苦む處が出て参りますから之を師匠に就て質問すると師匠は師匠だけに書籍の外に細かに説明を與へ

てくれませうが此師匠に就くには三つの關門があります、即ち第一に時間に餘裕のある人でなくては師匠に就て習ふと云ふ暇がありません、第二には多少囊中の裕な人でなくては師匠に就て習ふと云ふ譯に参りません、一週間に一日づゝ師匠を家に招ぐにも一ヶ月には數十圓を要します、又三日に一度師匠の家へ通ふにしても十餘圓は要します、第三には地方に在つて師匠の無い處では何に時間の餘裕があつても囊中が裕でも度々東京や大阪から師匠を招くと云ふ譯にまゐりません、只地方ばかりでなく東京市内でも近傍に師匠の住して居るものゝ無い町では到底通ひ切れぬこととなります、然れば將棋の本筋を學ぶには如何せんかと云ふ問題に就ては左の結論となるのであります。

結論 第一は一日師匠に就て三日書籍で研究する、第二は師匠の家へ三日目に通學する、第三は地方又は師匠に遠き町では書籍に就て研究すると云ふ事に歸着致すのであります。

研究資料に供すべき書籍

第一に將棋の本筋を學ぶには定跡から研究するのであります但其資料には近年將棋新報社で編輯した定跡の講義書と本堂で出版いたしました土居八段の著書があります、古來より棋界に重んぜられて居る定跡書類を掲げますと。

- | | | | |
|-------|---------|-------|---------|
| 相懸定跡集 | (大橋宗英著) | 將棋妙手 | (六代宗桂著) |
| 同 興 義 | (大橋柳雪著) | 駒組重觀抄 | (伊藤宗看著) |
| 將棋歩式 | (大橋宗英著) | 將棋絹篩 | (福島順喜著) |
| 將棋早指南 | (大橋宗英著) | 將棋獨稽古 | (福島順喜著) |
| 將棋早學 | (大橋宗桂著) | 將棋精選 | (天野宗步著) |

以上が定跡の書籍で有名のものであります、が定跡を研究の傍ら古人の實戰書も研究せなくてはなりません、其有名なもの

- 將棋 奇戰 (大橋宗英著)
- 將棋 絶妙 (伊藤宗看著)
- 將棋 粹金 (大橋宗英著)
- 將棋 玉手箱 (伊藤看壽著)
- 將棋 帆範 (大橋宗俊著)
- 既に實戰將棋の書籍を知つたならば次には圖式即ち詰將棋も研究せなくてはなりません。此には著名のものゝみを掲げます。
- 將棋 力草 (初代大橋宗桂著)
- 將棋 駒競 (伊藤宗看著)
- 將棋 圖巧 (伊藤看壽著)
- 將棋 精妙 (伊藤宗印著)
- 將棋 明玉 (大橋宗桂著)
- 將棋 輝光 (大橋宗英著)
- 將棋 手鑑 (天野宗步著)
- 御城將棋 (代々のお城將棋)
- 將棋名家手合 (明治年間の棋譜)
- 將棋 極妙 (桑原君仲著)
- 新選圖式 (福泉藤吉著)
- 養真圖式 (大橋宗與著)
- 將棋 玉圖 (桑原君仲著)

大矢數 (古詰將棋)

これ等の書は何れも絶版になつて居りますが、其中の一二は活版で翻刻されたものもあり、また而して大部分は未だ翻刻されませんので、本堂では漸次之を翻刻する目的で「將棋全集」と題し既に其數卷を發行して居りますから、詳細は巻末の目録を御参考願ひます。

研究の順序

前章の如く將棋の書籍には定跡と實戰と詰將棋の三種があつて、何れが必要、何れが不必要と云ふことはありません。三種ともに同時に研究して行くべきことは勿論であります。尤も深く研究を要するのは定跡でありますから、之を日割にして見ます。一週間のうち四日定跡、二日實戰、一日詰將棋と云ふ位の程度で研究して行くのが適度であります。併しながら其人の性質に依つて定跡の研究を好む人と實戰譜を並べて見るのを好む人と又詰將棋に凝る人がありますから、一様に前記の日割を強めることは

出来ませんが、若し理想的に将棋を研究して行くと云ふことにならば前記の程度に依り好き嫌ひに依らず研究して行くのが本意であります、然る時は第一に定跡に明るくなりなますから見苦しき局面を招ぐ恐れがありません、又實戦に就ての知識も出来なすので機に臨み變に應ずるの力も生じます、其上詰將棋に依つて終局の寄せが巧みになりなますから面白い詰を發見して勝利を得るやうなことがあります。

然るに世間には一方にのみ凝り固つて他を疎かにする人がありますので動もすると「あの人は定跡が明かるいから始めは何時有利の局面に指すが實戦の力が乏しいので勝ちに出た將棋を負けることが多い」と云はるゝ人があります、又「あの人は詰將棋を詰めさせると五六段の力があるが實戦の力は初段か二段に過ぎぬ」と云はれる人があります、之れは其好き嫌ひに依つて一方にのみ偏した爲めでありなますから、眞實に強くならうと云ふには三種とも好き嫌ひなく研究せなくてはなりません、定跡ばかり精しくても實戦に臨んで弱くては甲斐がありません、又何等詰將棋を上手に詰めて

も對局の始めに下手に指しては終局の寄せまでは維持が出来ませんから之も甲斐のないことでもあります。

扱以上の次第でありますから先づ定跡を第一に研究すると致して其研究は何なる風に研究して行くのが有利かと申しますと、云ふまでもなく下から上へと研究して行くのが順序でありまして先づ六枚落ち(俗に云ふ金銀)から研究して試みに高段の先生に六枚落ちで指してもらはうと致しますと幾日でも其先生と對局して勝たり負けたりして居る中は未だ六枚落ちが充分腹へ入らず即ち六枚落ちを卒業せぬのでありますから尙ほ其六枚落ちを研究して行くのであります、之れは先生に就て研究する計りでなく書籍の上で研究するのも同様であります、縦令何なる大家名人に出逢つても六枚落ちでは決して負けぬと云ふ程度に至らなくては卒業したのではありなません、其理由は平手や香車落の如きものゝ定跡となりなますと必勝と云ふまでに確實に下手又は先手の勝ちと云ふ處までは研究がつんで居りなませんが六枚落ちから二枚落ち位までは研究さへ積め

ば必ず負ける筈のない程に定跡が出来て居るのでありますから、それで勝てぬと云ふのは未だ定跡の研究が足らぬからでありますして何なる先生に出逢つても六枚落ちならば一番も負けぬと云程に至つたのが即ち六枚落ちの卒業であります、次に五枚落ちに移るのであります五枚落ちと申しますと上手が六枚落ちの處へ左の桂馬を一枚入れたのであります、此桂馬が一枚入つただけで大した相違であります、之れまで六枚落ちで百番指して百番勝つた先生に對して桂馬を一枚入れられますと反對に百番が百番勝てぬやうになります、之は六枚落ちを卒業しただけの力の人であります、然し既に六枚落ちを卒業した力が付て居れば百番指すまでに至らずとも早く研究がつひて卒業も早くなりますので六枚落ちの時より進歩が早くなります、次に四枚落ち（金銀に兩桂を入れたもの）から二枚落ちまで順序を正して研究して或る標準の先生に對し又は先輩に對し何時でも完全に勝てるまでになつた時に次の駒を殖やしたものに移るのであります、斯くして順序正しく研究して行きますのが本當の將棋の研究でありますが何分

其通りやつて居ては倦怠を生じますので其間に飛車落ちとか角落ちとか平手とかの研究を雜せてやることも不可ではありませんから、それは其人々の目的次第で倦怠ぬやうに調節して行くことも一の方便であります、併し眞實の研究法としては飛び越して先きへ出すに順々に卒業して行くのが高段ともなるべき遠大の研究法であります。

定跡の效果と駒引きの割り合

將棋は双方とも同じ駒數で同じやうに並べて指すのでありますから平手ならば力の強い方が必ず勝つのであります但其力を平均させる爲めに駒を引くことにしてあります其駒割は

- 一段違ひ 香車落ちと平手と 交互二番一組
- 二段違ひ 香車落ち（左右二通りあり）
- 三段違ひ 香、角交互二番一組

- 四段違ひ 角行落ち
- 五段違ひ 飛車、角行交互二番一組
- 六段違ひ 飛飛落ち
- 七段違ひ 飛車落ち、飛車香車交互二番
- 八段違ひ 飛車、香車落ち

以上の通りでありますから初段の人が名人即ち九段（将棋の最上位）に對しては飛車と左の香車を引かれることになりすから若し名人に二枚（飛車と角）を引かれる力の人では初段にならぬのであります、因みに右の駒割りで駒の位を申しますと
 飛車は六段 角行は四段 香車は二段と云ふ事になるのであります
 扱前に申した通り強い人と弱ひ人との力を平均するため駒を引くことにしてありますから其弱ひ人が段々と強くなるに従つて強い方が駒を殖やして終ひには同じ駒數に至るのでありますから弱い方が研究さへ怠らす行けば終には平手にまで至る道理であり

ます、即ち同じ駒數であるべき處へ駒を引ひては勝てる道理がないのであります、此駒を引ひて勝てる道理が無く、言を換へて言へば駒を引かれて負ける道理が無いと云ふ駒組を研究して書き著はしたものが即ち定跡の書籍であります、故に六枚落ちは勿論、それより上つて香車落ちまでは何れの定跡も下手宜しと云ふ事に歸着して居るのであります、併しながら香車落ちとなりすると駒割りでは二段の相違がありましたも其香車を落した方の傷みが極めて輕微でありますから動もすると其効果が顯はれず平手同様の結果を來すことがありまして必ずしも下手宜しとまでの研究がつひて居らずに必勝とまでは斷言が出来ませんから之れは後に香車落の定跡を出す處に於て改めて説明を加へます、次に飛車落ちとか角落ちとかになりすると充分に下手よしの研究がつひて居りますから下手の研究さへ充分であれば負ける道理の無いのであります、上手は上手だけの力で紛らはす事のありますので高段（五段以上）の人でも名人や準名人（八段）に對して大駒を引かれて負ける事がありますが之れとても後に能く調査

して見れば下手が悪ひ手を指した爲で下手が定跡に明き時は紛らはされずに済むのであります、言を換へて言ひますと上手が特別の名手を指したと云ふよりも下手が間違つた指しかたをやつたから負けたと云つてもよろしいのであります、即ち飛車や角と云ふ大駒を落して上手が勝つと云ふ道理がなく研究さへつけば下手必勝と云つて可なるものであります、況して飛車、角を落した上に尙ほ桂馬、香車を落しましては上手が勝てる道理が無いのでありますから二枚落ち以下となりましては益々下手宜し即ち駒を落された方が必勝たるべき方法を説いたのが定跡の効果でありまして、定跡を研究するのは此道理に達する目的であります

定跡を習つて弱くなつたと云ふ人の誤解

素人の中で動もすると「定跡を習つて弱くなつた」と云ふ人がありますが、それは本當に定跡が腹に入らず之れまで勝手に指して居た人が定跡に拘泥して手遅れをするか

らであります、斯云ふ人の指すのを見ますと何でも自分の覚え始めた定跡にのみに拘泥して變通を知らぬからであります、將棋は相手があつて指すのでありますから只自分の知つただけの定跡を指して居て相手の進んで来る處を察せぬ時は却て此方が駒組をして居る中に指し込まれて負ける事になります、定跡も向ふの駒組やら進んで来る手段に依つて此方も此れに對する定跡に指さなくては、譬へて見れば戦争に敵が左から進んで来るのにも拘はらず右の方ばかり守つて居ると同じで其守り方が如何ほど戦法に適つて居ても効果がありませんで忽ち左から破れて来ると同じであります、故に定跡は攻めるにも守るにも敵の陣立を見て變通しなくてはなりませんが生兵法の中は却て指し悪いこともありませう、然し次第に研究が積んで攻守の手段が明かとなつて参りますと無定跡で指した時に比べると盲人が眼明になつた程に明るくなつて、若し定跡を知らぬ人と指しますと攻めれば忽ち敵陣を突破し、守れば何ほど攻められても決して我陣中の亂れる恐れがありません、之れは我駒は互ひに繋ぎが付て相ひ助けて

活躍するに反し無定跡の人の駒は離れ々々になつて孤立で戦つて居りますから一度隙が生じますと忽ち潰亂に陥るのであります、要するに定跡に拘泥して却て弱くなつたと思つたらば之れは未だ定跡が腹に入らぬからだと悟り一層研究して行けば臆て夢の覺めたやうに強くなることは確實であります。

將棋の規定

將棋の上達は定跡、實戰、詰將棋の各書に就てそれ々々研究すべしと云ふことを説き了りましたから之れから對局の話に移ることに致します、併し其前に少々將棋の上にての規定を述べます、之れ等は多少にても將棋を指す人は既に承知の事と思ひます、が順序として述べるのであります。

盤、駒

將棋盤の用材は樞を一等といたし其樞も日向國の産出を本場と致します、之は木地が軽くて弾力があるからであります、又同じ樞でも柾目の細かい程が上

等で板目のものは下等であります、寸法は古法は竪一尺二寸、幅一尺一寸、厚さ三寸五分、足二寸五分でありますが近來は厚味の高きものを好み四寸盤、五寸盤と云ふのが上等とされて甚だしきは六寸あるものもあります、其代り局面が狭くなつて竪一尺一寸、幅一尺位になつて居りますが之れは製造者が古法を無視して木材を吝むからであります、心ある人は注文の際に古法を示して造らせる事に致したいものであります、尤も近來は對局者が厚き座布團を敷ますのと外見立派な點からして厚味の四寸から五寸までのものを用ゆるのも不可はありませんが局面の廣さは古法通り一尺二寸と一尺一寸にしたいものであります、又樞が高價のため代用とし桂を用ひますが公孫樹も亦用ひられます、但し一般には桂が多く用ひられます、之も木地が柔らかで軽いからであります、樺などは硬くて不適當であります、駒當りが強いと肩が凝るかの嫌ひがありますからであります、次に駒は柾植を一等と致します、其中でも九州の大島産を最上といたします其他

代用品に横を用ひますが之は安物であります、柘植でも木目の細かき程光澤を生じますので柘目が貴とばれます、一種藤巻と稱するものがありまして一層木目が緻密で虎斑になつて居りますので之を好む人もあります、之れは柘植へ藤が巻きつきて木地の變體を來たしたものであります、近來は其代用品として根本の固い處を用ひられて居ります。

駒の文字は柘植のものは彫刻されて其中へ漆を埋めて磨ぎ出したものと又其上へ文字を盛り上げたのがあります。

字體は楷書のものに金龍、真龍、安清などがあり、楷行に水無瀬と云ふのがあります、金龍と真龍は大橋家で製した文字で安清は大坂方面に多く水無瀬は豊臣秀吉のために公卿の水無瀬卿が書いたのだと申します。

一種黒柿へ白字で書き又象牙で造つた駒などもありますが寧ろ玩弄品で實用には柘植に越したものはありません。

横、柳などの安物は彫刻せずに直ちに漆で書たもので文字は例の尻の丸くなつて居るものであります。

禁手 將棋に禁せられてあるのは二歩を張ること、生歩で詰めること、百日手を指すことの三つであります、二歩とは同じ筋へ二つの歩を用ゆること、生歩とは王様の頭へ歩を打て詰める事でありまして突き歩と成歩は差支へありません、百日手とは一つ處で同じ手を繰り返すことでは三度までは許しますが四度目には攻める方で他の手を指さなくてはなりません。

術語

序盤 始めの駒組を申しまして凡そ三十手位までが普通のやうであります。

中盤 いよく接戦となつて互ひに攻めつ守りつして居る中で普通百二三十手で終局となるものならば百手以内の處であります。

分れ 序盤の駒組即ち定跡で互ひに陣營を張り之から敵へ仕懸け又は敵を受ける處で即ち中盤の初めでありませす。

終局 いよいよ敵陣に肉迫して勝つか負けるかの處であります。

必死 終盤に至り一手隙きを懸けるので王手々々と行かすに敵が防がずに居れば

二手目に詰むやうに間接に寄せて行くのであります。

寄せ 王手々々でも必死でも次第に寄せて行つて詰めるのであります。

詰 王の行き處なきやうにするので勝負が定つた時であります。

其他 スグとは金などが真直に上ること寄るは金などが横に動くこと、廻るとは

飛車が横に遠く動くこと、出るは向ふへ行くこと、引くは後へ退ること、早越し

とはまだ王手のかゝらぬ中に王を安全の地へ越すことで又早や逃げとも申します

中間とは飛角などで王手を懸けられた時に直ちに王の頭へ間駒を張らず中途へ間

駒を張ること。

待つたば上達の妨げ

將棋を指すに待つたをやつては上達を防げます、假令仲好しの友人と指すにも待つたをやるのが癖になると他人と指す時にも其癖が出て見苦しい計りでなく争ひなどが起りますから待つたは絶対にやらぬ癖をつけなくてはなりません、手から駒を離さぬ中は何幾考へても此方の権利ですから充分に考へて後に駒を下すことにし一旦駒を盤に置いたらば最早其駒に手をつけぬ覺悟をせなくては強くなれません。

一日に多く指さぬ事

一日に數番は愚一時間に數番指す人がありますが、それでは決して強くなりません有段者は早くても一日に一局位に止めますが素人でも上達を欲する人は一日に二三局に限り、其代り十分に考へて指すやうに癖をつけなくては上達を致しません、素人

の中は一手々々に得心の行くまで考へると云ふ譯にも行きますまいが、兎も角も五手や十手の先き位は考へて、我行くべき方針と敵の来るべき進路とを見定めて後に手を下すべきであります、一寸先きは暗で手當り次第に駒を動かすやうでは何時まで指しても策將棋を免れません、定跡を研究して上達を計らうと云ふには成べく定跡に従つて行動することを考へ、又終局の後は獨りで其勝敗の原因を研究して自分で之を發見が出来なかつたらば上は手の人か師匠に就て調べてもらふやうに致しますと臆て本筋に入つてメキ／＼と上達し初めて素人離れがして一時間に數番指すことなどは自然に止んでまゐります。

早く指さぬ事

何時よりの諺かは知りませんが「將棋は早馬の如く碁は牛の如し」と云つてありますが之れは意味の誤解を免れません、若し將棋は早く指すべきものと解釋すべきもの

ならば餘程へボ將棋の作つた諺でありませうが恐くは其指し方の早い遲いを云つたものでなく、其性質を云つたものでありませう、即ち將棋は武士的で奮撃突戰君の爲めに死し國のために倒れて已まぬと云ふ活潑の精神を持つたものであります、碁は一石一目を數へて算數的に打つのでありますして自然地味であります、故大隈侯も將棋は武士の如く圍碁は商人の如しと云つたことがありますから其性質に於て將棋は早や馬の如く圍碁は牛の如しと云つたのであります、然れば古來の名人大家の將棋には一日に一手を考へた例もあり現今の棋師でも一日に十手位を指し一局の將棋に一週間を費やした例も少なくはありませぬ、普通五六段以上の棋師の將棋は一日に勝負がつけば早い方で大抵は一局に二日位はかゝります、然れば將棋の上達を計らうと致しますならば、成るべく能く考へる習慣をつけて行くのが必要であります、一手々々に考へて指しますと、之れまで研究した定跡の手も思ひ出し、又自力でも面白い手が浮んでまゐることがありまして、譬へて見ますと美味を丸呑にするのと舌で味はつて食べる

とだけの相違があります、尤も素人に向つて一日に一局づゝ考へて指せと云つたからとて直ぐに其通りには參りすまいが成るべく其方針で考へるのが上達の道であります、然していよゝ一手に一時間も考へるだけの餘裕が出たならば其人は最早素人離れのした人と云ふことが想像されるのであります、併し下手の考へ休みに似たりと云ふやうに他に手の無き處即ち取るべき駒を取らずに考へたり、王の頭へ金を打たれ逃げ處が無くなつてから考へたりするのは眞の考へでなく下手の考へ休みに似たりの方でありますから之と一様にしてはなりません。

駒を手に握る勿れ

へボ將棋に限つて手に駒を握つて居りますが之れは第一に汗が付て汚ないものであり又手に駒を握つて居りますと「早く打て早く指せ」と駒が催促するやうな心持ちが致しますので十分考へることが出来ません、若し駒台があつたらば駒台の上へ置き、駒

台の無き時は鼻紙を疊んで右膝の處へ置き之へ駒を並べて我からも敵からも一目瞭然にして置くのが法であります、而して我からも敵からも持ち駒を聞かすとも明かになつて居る上は之を問ふことをせず心の中で了解するのが上達の一法であります、或る人は夏冬ともに手に扇を持てば自然に落ちつきが出て駒を握らずに濟むと申しましたが出来得べくんば其したいものであります、尤も高段の棋師は大抵は冬でも扇を持つて居ります、斯くして丁寧に考へつゝ指せば一方の考へずに指す方が多く負けて考へて指す方は勝利疑ひありません。

對局の禮

如何ほど懇意の友人と指すにも箕座をかひたり立て膝をしたりするのは不可ません、長座して足が痛くなつたらば廊下へ出て庭を詠めなどして足を安めるやうにするのが禮であります、又對局の初めに下た手の方が駒箱を取つて上は手に渡し（又は主客の

場合は主人に) 上は手が駒を盤の上にあけて王を並べたのを見て下手方も王より並べ始めるのであります。(俗説に王の字の方を上は手へ渡し玉の字の方を下た手が持つと云ふのは誤りで本来は双方とも玉の字であります) 其順序は王より左右の金、次に銀次に桂、次に香、次に飛車、次に角、次に歩と云ふ順であります、斯くして駒を並べ了つたらば下た手より一禮し、上は手も答禮して指し始めるのであります、而して第一手は角道を突くとか、銀が上るとか定跡に依つて極つて居るやうなもの、あはて指し始めるのも見悪いものであります、先づ一と思案してから指し始めるやうに致したいものであります、況して敵は何の駒組で来るか我は如何に駒組みせんかなど、指さぬ先きに機微を察する場合もありませんから萬事に慎重を缺かぬやうに致すのが本筋に入り上達すべき方法であります。

以上にて將棋と云ふことに就ての大畧を述べ了りましたから下編には諸種の定跡より分れ、寄せ、必死、詰等の講話に移ります。

定跡の種類

定跡は何時の世に誰れが始めて書き残したかは不明であるが初代宗桂が初代本因坊と指した將棋に既に一定の指し方があつた處を見ると豊臣氏の末から徳川氏の始めには最早や定跡が出来て居たことと思はれます、勿論其後に至つて種々研究されて進歩した定跡が出来たことは明かでありまして之れに最も力を注ひたのが初代宗英であります、此宗英の定跡書には「歩式」や「相懸集」を始め數種ありまして今日の棋師も多くは之れを基礎といたして居るのであります、之れに次で同じく二世宗英を名乗つた初名英俊、改め柳雪も定跡の研究に力を盡し相懸集二編(即ち本堂で刊行した奥義集)や將棋早指南などの著書があつて今も尊重されて居ります、此間に音通和尚の美濃流や石田檢校の石田圍ひ又は檜桓是安の是安流など、云ふ一種の定跡を廣めたものもありますが下つて天保以後即ち近世に至つて天野宗歩と云ふ猛將が顯はれまして「將棋

精選」に依つて自家の研究を擴め之が今日では一般に用ひられて居ります、其後にも定跡には相當の強者も顯はれて居りますが格別の新研究に依つて一派を擴めたと云ふ名家もありませんから定跡も大抵研究の極度に至つたのでありませう、或ひは一手二手位づゝは上記の定跡書以外に研究された手もありますが之れとても上記の定跡書に就て一局部を可否したものに過ぎませんから、今日では最早や定跡の研究には十分材料とすべき書籍が備はつて居るのであります。

而して天野宗歩以前の定跡書は何れも二枚落ち以上で六枚落と五枚落と四枚落と云つたやうな定跡は書いてありませんでしたが天野だけは此六枚、五枚、四枚の定跡を書き残されたのであります、故に普通は天野以前には六枚、五枚、四枚の定跡書は絶無のやうに云はれて居りますが、必ずしも絶無とは申されませんが、即ち明和年間に大阪の棋師福島萬兵衛の著はした「珍手選」と云ふ小冊に六枚、五枚、四枚の定跡が五六番出て居りますから天野以前にも此定跡があつたには相違ありません、此珍手選は棋師

も知らぬ珍書でありますが本堂で刊行して居ります。

定跡は何から研究すべきか

上編に説きし如く定跡は六枚落ちから順序を以て平手まで研究するのが最上でありませうが此小冊には之を悉く説いて行くの餘地がありませんが將棋の研究上に於て初心が心得て居るべき條件だけを講演することに致しますが夫には一番多く條件の備はつた平手二十八手組を實例としてお話しするのが比較的實用的であると思ひますから之れを基礎として他の定跡の事にまで及ぼすことに致します。

平手二十八手組

- 因七六歩 三四歩 因二六歩 八四歩 因二五歩 八五歩 因七八金 三二金 因二四歩 同
- 歩 因同飛 八六歩 因同歩 因同飛 二六飛 二三歩 因八七歩 八四飛 因四八銀 六二銀
- 因六九玉 因四一玉 因五九金 五二金 因三六歩 七四歩 因三七桂 七三桂

以上を二十八手組の相懸りと申しまして之れより直ちに先手が「三五歩」と仕懸けることもありますが其では急激に過ぎますので此二十八手の次に

図一六歩 一四歩 九六歩 九四歩 五六歩 五四歩

と同じやうに指し、それから三五歩と仕懸けることもあります、併し此小冊子で之を一々説ひて行くことは出来ませんから此には二十八手組の定跡を研究すると云ふよりも此の如く駒を動かすに就ての意味合を説て一般將棋の心得と致すのであります、既に本筋を學んだ人には必要もありませんが未だ本筋を學ばず素人同志のみで指して居る人には參考となるだらうと思ひます。

指し手の講義 先手方が第一に図七六歩と角道を明けたのは平手將棋では十中の八九までは同様であります、只「引き角」と云つて角を七九へ引き落して敵の角頭の方を狙つて指す定跡で俗に鳥指しと名くるものは角道を明けずに指すこともありますが之れは其人が特に指し慣れでもして居ると云ふ場合に指すことがありますので普通は

大抵七六歩と角道を明けます又敵を迷はす考へで同じく角道を明ける考へであつても第一に二六歩と飛車道を明け後手三四歩、先手二五歩、後手三二金と上つた後に七六歩と角道を明ける人がありますが之れは敵の手段を伺ふために變則に斯云ふ前後した手を指すのでありますから敵が迷はずに上記の如く普通に受けてまゐりますと結局同じ手になるのであります、然るに後手が三二金と上らずに三三角と上つて參りますと先手は急に二四歩、同歩、同飛と指して飛車先きの歩を交換することが出来ませんが却て損を招くやうなことが無いとも限りませんから第一番に七六歩と明けるのが普通となつて居ります、扱何ゆる此七六歩の手が第一に指す手となつて居るか云ふに此歩を明けますと一手だけで早くも角が敵陣まで睨むからであります駒の位から申しますと角よりも飛車の方が二段上でありますが始めに二六歩と飛車道を明けても飛車が直ちに敵陣へ通する譯けに參りませんから此點に於て角道を明けるのが緊しき手となつて居ります、次に後手が三四歩と角道を明けるのも同意味であります、次に先

手の圍二六歩と飛車道を明けるのは居飛車で指す將棋の普通であります。素人の將棋に先手が二手目に此飛車道を明けずに二二角と角を交換する人がありますが之れは一手損で先手が後手になりますから黒人は餘り指しません、何故に一手損かと申しますと二二角なる同銀と指された時に先手も八八銀と上つて居なくてはなりませんから即ち其だけ損となります。最も手に角を持つて指す考へで角を交換したのでせうが後手も同じやうに角を手に持つて居りますから利害は同様であります、若し又後手から八角なると交換して来るならば先手は同銀と取つて二手多く指すことになり、又八角を替らば替れと云ふ顔で二六歩と指したのであります、又人に依つては飛車を五八へ廻り中飛車に指すか六八飛と廻つて四間飛車に指す考へで二六歩と指さず六六歩と自分で我角道を留めて指すこともありますが折角明けた角道を我から留めて指すのは丁度我重砲の先きへ歩兵を並べたやうなもので一時此角の働きを止めますから先手として角道を止めるのは弱腰の指し方と申されます、但し後手は受けて指すのが自然の

理でありますから四四歩と角道を留めて一時敵角の窺きを止め次に四二飛と廻つて四間飛車で指すことは常に見受ける處でありまして之れは弱手とは申しません。尙ほ飛車の働きに就てお話ししますが飛車が先手方の二八後手方の八二に居りますのは配置上に於て一番有利の地位であるから斯く定められてあるものでありますから双方とも居飛車のまゝで戦ふのが正法と思はれますが之を態々中飛車や四間に動かすのは理に於て損と云ふことが明であります、尤も前に申しました通り後手は受けて指すため四間に廻るのも左まで不可とは申されませんが先手として四間へ廻り角道を留めて指すのは攻勢に出づべき筈の先手が却て守勢を甘する形でありますから堂々たる指し方とは云へません、此外に袖飛車と云つて飛車を一間左へ寄り三筋から挑戦する手段もあります。併し四間や袖飛車は好んで研究する人がありますから我研究が此手段に長じて居て敵が不得手と見た時に臨機に指すと云ふ一種の策戦もあります、中飛車に至つては黒人は殆んど指すことが

ありません之は中飛車は敵に受け留められ易いのと我陣營を固めるにも中央に飛車が居ては金銀の配置が充分に参りませんなどで黒人は指さぬのであります、之れがため中飛車の定跡と云ふものは度外視されて何れの書にも殆んど出て居らぬと云つて宜しき程であります、然に素人は好んで此中飛車を指しますが之れは本筋の定跡を知らぬ爲めで即ち素人の素人たる處でありますから幾分定跡を學んだ後には中飛車を指すことは止んでまゐります、故人の諺に下手の中飛車、上手の居飛車、力指しには四間飛車と申してありますが之れで以て居飛車が正方で四間飛車は力量の争ひとなり中飛車は下手の好む處であると云ふことが明かであります。

但し左香車落の時に上手方が中飛車に廻つて指すことは往々に見受けますが之は上手が中央から挑戦し下した手方をして香車の無い上手方の端から仕懸けるの暇なからしむる手段でありますから之れは別段のことではありません。

又向ひ飛車と云つて飛車をズツト左へ廻し角の居た二筋に備へて指すこともあります

が之れも後手の指すべき手で先手では好んで指す手ではありません、以上の次第でありますから本文の通り先手方七六歩、後手三四歩の次に先手は二六歩と飛車先の歩を進めたのであります次に後手も

八四歩と飛先の歩を進めたのは之も居飛車で堂々と戦ふためであり、若し又後手が四間飛車で戦ふ考へならば此處で四四歩と角道を止めて指すのであります、此では正法の居飛車に出たのであります次に先手八五歩、後手八五歩は前の意の通り一步進んだのであります、七八金、三二金は共に敵の飛先きを受けて角の頭を守るの手であります次に、二四歩、同歩、同飛、八六歩、同歩、同飛は目的の通り飛車先きの歩を替り飛車路を通すことを兼ねて一步を手に持つて策戦の料に供へるのであります次に先手の二六飛と引ひたのは飛車を中段に備へて縦横に睨ますためであり、人に依つて此飛車を二八まで引くことがありますが先手としては弱手としてあります、二、三歩は之を打たなくては敵に二四歩と打たれるからであります、八七歩、八四飛

と引くのは先手同様に飛車を中段に置いたのでありますが後手は受ける方であつて後に先手から六六角と打つて飛車へ當てられる手がありますので其時に八二飛と引くことになりまずから始めから八四飛を止めて八二飛と引くことも一の手段でありまして之は強ち弱は手とのみは申されませんが、**四八銀六二銀六九玉四一玉**までは陣中の固めで互ひに同じ意味であります。次に先手の**五九金**に對し後手は**五二金**と上ります。此意味は少し異つて先手は後に飛車を切り捨てる含みでありますから金が五八へ上つて居ては後手に二九飛と打たれた時に直ちに王手となり一手損でありますから五九金と玉の横へ付て居るのであります。之に反して後手は飛車を渡しませんから五二金と上つても直ちに王手を懸けられる恐れがありませんから却て此方が玉の頭が固く横が廣いとの意で指すのであります。**三六歩七四歩三七桂七三桂**之れにて双方同じ様に駒組が出来ましたから先手は攻勢を取つて直ちに三五歩と突き同步と取らせ三三歩と打ち込んで接戦に及ぶ事もあります。但其手は過激に失するとの説もありま

して更らに一步を手に持つ準備に**一六歩**と突き**一四歩**と受けさせます。此端歩には大に意味がありまして俗に手の無き時は端歩を突くと云ふのは甚だ輕重があります。其故は先手の**一六歩**は次に**一五歩**と突き後手か同步と取れば先手**三三歩**打ちの時に後手同桂と取れば先手**一五歩**と歩を取つて其歩を**三四歩**と桂の頭へ打つ含みがあり又同桂と取らず他の駒で取つても一步を手に持てば種々の手段が出て来る局面となるからであります。又一五歩を後手が同步と取らずに他の手を指せば先手より**一五歩**と取り込んで後に**一四歩**と進み**一二歩**と打たせて後手の玉の通路を狭くし且つ端から崩す手段もありまず次に先手の**九六歩**も玉の出道を廣くしたのであり後手の**九四歩**も場合に依つては先手同様に**九六歩**と進み**九八歩**と打たせ玉の横を狭くする含みもありまして互ひに端歩は意味深長であります。故に端歩は負けずに突くと云ふ諺もありまして、但し櫓圍には左の端歩を突かぬのを主意と致しますが之れは端から仕懸けられた時に一手徳となる順序でありますから突かぬのであります。詳しくは櫓圍の定跡に依り



(圖は一四歩の局面)

(土居曰) 圖面の場合古書には三五歩、或は一五歩の開戦にて有望とあるも、現在研究の結果では先手攻撃力不足なれば善悪共に不明である。

會得あらんことを乞ひます、次に先手
 五、六歩後手五、四歩も中央の位を保
 つためでありますが先手は端歩の時と
 同じ意味で一歩を手に持つため五五歩
 と突き同歩と取らせ同角と取つて一歩
 を手に持つ含みもあります。
 以上で双方完全に陣營が布れましたか
 ら先手から三三歩又は一五歩と接戦に
 及ぶのであります。此後の手段は千變
 萬化、到底小冊に説き盡すことが出来
 ませんから先きに本堂で刊行した將棋
 全集の第一輯相懸定跡集及び第二輯

相懸與義に就て研究されんことを希望します、同書には一手々々に變化利害を説き綿
 密詳悉残る處なく痒き處に手の届くやうに始めから末まで解決してあります。
 因みに本文の指し手十五手目先手二六飛と引く處で三四飛と角道の歩を飛車で取る
 手があつて之を横歩取りと申しまして中々面白い變化が澤山あります。之も前記の
 將棋全輯第一、第二の二巻に詳細に説てありますから就て研究あらん事を乞ひます。
 以上は二十八手組を假りて將棋の大意と駒の働きをお話いたすため實例に引ひただけ
 であります。

局面の分析

將棋 局を分析しますと序盤即ち駒の配置は定跡であります、中盤即ち接戦を分
 れと申します、終盤即ち肉薄を寄せと申します其最後が終局の詰みであります其實
 例として相櫓の一局を出します。

先七六歩 八四歩 六六歩 三四歩 七八銀 八五歩 七七銀 三二銀 五八金 五
 二金 二六歩 六二銀 二五歩 三三銀 四八銀 四四歩 五六歩 五四歩 六八玉
 四二玉 七八玉 三二玉 六七金 四三金 七九角 三一角 八八玉 二二玉 七
 八金 三二金 三六歩 七四歩 三七銀 七三銀 三五歩 同歩 同角 三四歩 六
 八角 七五歩 同歩 同角 七六歩 四二角 四六歩 六四歩 三六銀 七四銀
 此邊までが序盤であります、之より中盤の接戦に入る。

先四五歩 同歩 先三七桂 六五歩 同歩 七三桂 四四銀 二四歩 同歩 先
 二三歩 同金 二五歩 同歩 先二四歩 同角 同金 四六角 五一角 二四角
 同角 先二五銀 四六角 三四銀 二八角 二三金 三一玉 四三銀 四一玉 (面圖)
 此處より終盤の寄せとなります。
 先四四金 五一玉 先五三桂 六一玉 先六三銀 同銀 同金 六二歩 八三銀 同飛 先
 七二金 五一玉

六歩角飛 駒持手後

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香					王	将	皇	
	飛				金	金	香	
	香	香		香	桂			
		歩		歩				
	歩	歩	金				歩	
	歩	銀	金				歩	
	玉	金					歩	
香	桂						香	

二歩金 駒持手先

(圖は四一玉の處)

(土居曰) 本局は相櫓の相掛りである、先手桂を利
 用して四、二兩筋より敵陣攻撃の趣向大に面白い、
 圖面の場合先手四四成銀と駒を捕つたのは穩健なる
 好手段である。

之より終局王手々々の詰みでありま
 す。

先六二金 四一玉 先四二歩 三一玉 先
 三二歩 四二玉 先五二金にて詰み

勝局の要意

勝つて兜の緒を締めよ 將棋が敗局と
 考へた時も自暴自棄になつて疎畧に指
 してはいけません、何處かに挽回の手
 があるか、又は棄て身で切込むなどの
 妙手を發見するものであります、それ
 ゆゑに絶対に詰みの見えるまでは矢張

り慎重に考へなくてはなりません、況して勝局と見た時は一層慎重に考へなくてはなりません即ち勝つて兜の緒を締めよと云ふのがそれであり、人情として勝局と見て喜ぶのが當然でありますから誰でも勝局となると心が浮き立つて安心の色が出ますが安心と同時に虚と云ふ隙きが出ますので動もするとボカを指すのであります且つ初心の中は少しも早く勝つて仕舞ふと云ふので勢ひ能く王手々々で敵を追つかける氣になります終局までの詰みを見定めずして王手々々で追懸けると動もすると指し切つて敵を詰め損なふことがあります、尤も終局まで詰み切つて王手々々で詰みがあると思つたならば勿論何十手でも王手々々で追懸けて詰めるのが本筋でありますが一王手々々で詰むと云ふ處まで讀み切れぬ時は無暗に王手々々をせず一手隙き即ち「必死」を懸けるのであります必死と云ふは自分の方には、まだ一手で直接に詰みがないと見極めた時に敵の玉將へ向つて一手隙きで詰めるやうに間接攻撃を行ふのであります、然る時は敵は之を防禦するために持駒を使ふとか玉の側の駒を切り棄てるよ

云つたやうな苦境に陥りまして我方は益々安全になりまし最後の勝を収めることが出来ず、何でも勝つのが目的でありまして必ずしも早く詰めなくてはならぬと云ふ道理はありませんから愈々勝局と見た將棋は一層入念に指さなくては最後の失策をやつて勝ちが敗になることが珍らしくはなりません、中盤位までの失策は或ひは回復し得らるゝこともありますが終局の失策は最早や回復がつかまへません故に勝つて兜の緒を締めること云ふ金言を忘れてはなりません
必死の實例は古來の指し將棋を並べて見ますと幾何もありませんが殊に此必死の圖式を作つたのは天野宗歩師の門人、渡瀬氏でとりませんが一説に之れは天野氏の遺稿だとも申します、それは何れにしても其原稿を故木下孝太郎氏（五段）が手に入れて之を將棋新報に投稿したことがありますが参考のため其數局を出しまして並せての其指し手を掲げます、之れに依つて必死の味を會得あれば實戦の際に大に得る處がありますから丁寧に研究あらんことを希望いたします。

必死の一(解釋) 此場合に先手方王手々々で詰めやうとしても詰みがありませんが一
手隙きを懸けて行くと後手方は暫時は防ひても追々窮迫に陥つて終局防禦の手段が盡

必死の一 (持駒角、金、銀)



きます、其一手隙きは先手方始めに(九七、一
角と打ちます後手之を棄て置ひては次に先
手に(九六二金打と指され(九同銀(九同角なる
で詰みますから始めの七一角に對し後手(九
七四銀と桂を取つて玉の出道を作ります先
手(九六一銀と打ちます後手之を取つても角
を取つても頭から金を打たれますから(九七
三玉と逃げます(九六二角となる之を取れば
(九七二金打で詰みますから(九八二玉と逃げ
ます(九七二銀なる(九三玉と逃げる此處で

九二玉と逃げては七一ると突き込まれて一手早く必死が來ますから九三玉と逃げたの
であります次に先手(九八四金と打ち棄てます之を同歩と取りますと矢張七一で一手

必死の二 (持駒角、金、銀)



早くなりますから(九八二玉と逃げる(九七一銀で最早後手は何の駒を打つて
も助かりません即ち(九三銀と打ても同金、
同桂、八二で詰みます、斯くの如く一手
一手に寄せて王手々々のみ行ず間接に窮
地に入れるのが安全第一の勝であります。
必死の二(解釋) 先手始めに(九六一歩なる
と指します之は意外に遠廻しの手のやう
であります之を棄て置けば先手(九四歩
八四玉(九五角(九四玉(九七三角なるの

明き王手で防ぎがありません又九四歩の時に八二玉と逃れば九一角と打ち棄て同玉、九三步なるで後手は防ぎがありませんから始めの六一歩なるを同飛と取ります次に

必死の三 (持駒銀)



と取れば先手七一角と打つて間駒を八二へ打てば九四歩、八四玉、六二角なるで防ぎがありません又六一歩なる同銀と取れば同七三銀打同金同七一角打で防ぎはありません必死と云ふのは斯の如き閑手のやうで緊しき手でありますから對局の際に此云ふ手のある事を忘れず考へますと滋味津津として將棋の面白き事が知られてまゐりますから充分腹に入れ置ことを希望します。

必死の三 (解釋) 始めに同七、一銀と打ち棄てます之を棄て置ては八二とで詰み又八一銀引くと防ひても九二と、同玉、九三步なる、九一玉、九二とで詰みますから始めの

必死の四 (持駒銀)

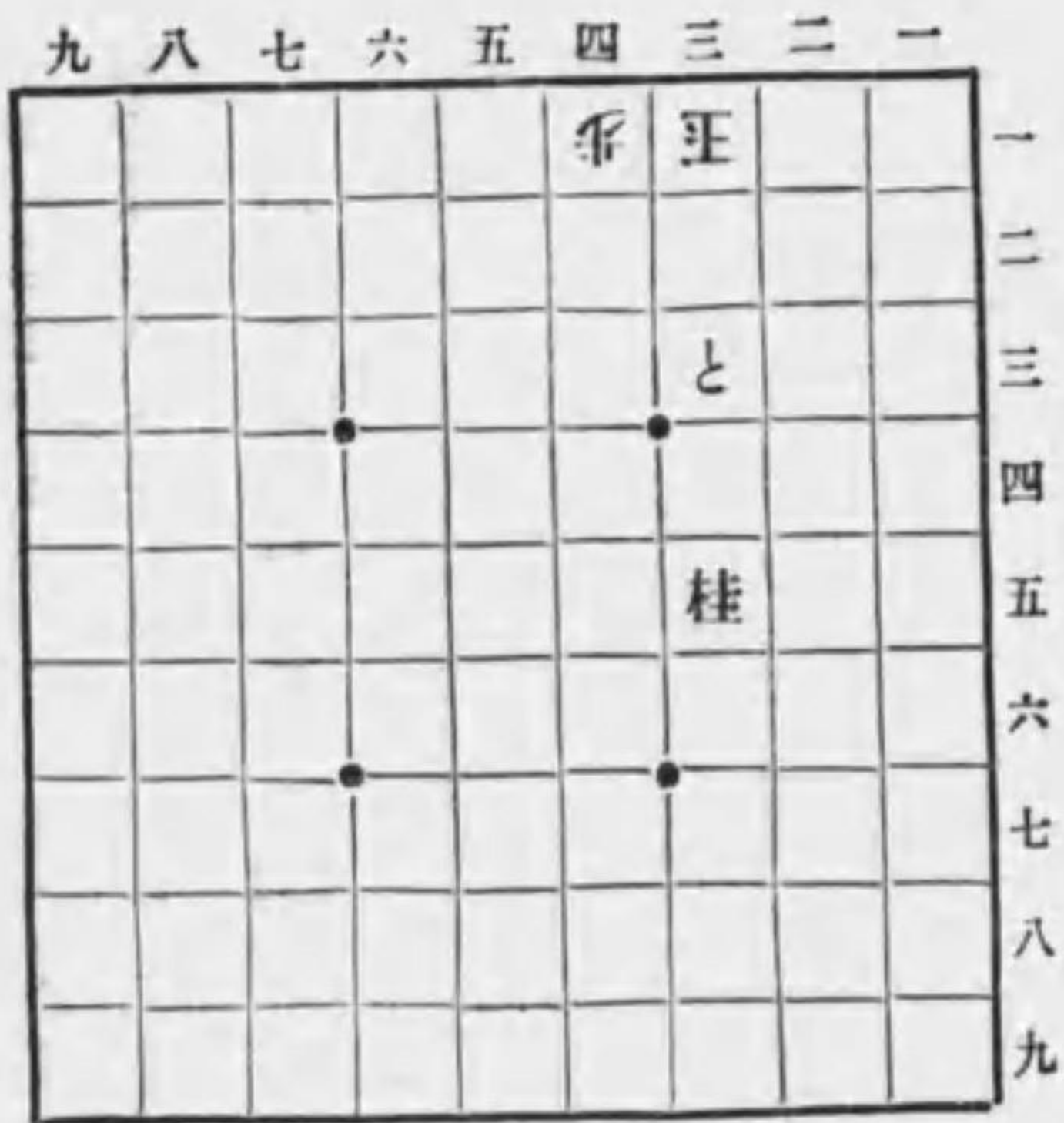


七一銀を同金と取れば矢張り九二と、同玉、九三步なる、九一玉、九二とで詰みますから六一銀の時に同七三銀と玉の逃げ道を明けます、此時先手九二とと取つては同玉、九三步なる、八一玉で終ひ逃げられますから今度は同八二とと香車を取ります同銀は當然同九三步なる同歩同飛なる同銀同香なるで次に後手が何の駒を八一へ打て防ひても八二銀打ちで詰であります。必死の四 (解釋) 始め先手同三三金と引き

ます之を棄て置けば二二迄、二四玉、二三迄で防ぎがありませんから後手▲一二金と打つて防ぎます、先手●二二銀と打つ之を同金と取ると同迄、二四玉、二三迄で同じ詰みとなりますから二二銀を取らずに●二四玉と逃げる●三四金●同玉●四四迄で後は二五玉でも二四玉でも三五迄で詰みとなります。(以上必死の實例を示したのみであります)

輕卒なること勿れ詰むか詰まぬか

詰みがあると見ても敵の妙手に依つて詰みを逸すことがある、故に詰める方も敵の如何なる防禦手段があるかを充分に研究して後に仕懸けるのが肝腎である、又詰められる方も慌て、防がずに落ちつひて考へて見るのがよろしい、能く研究して見ると意外の妙手で遁れ得る手を發見し得ないとも限らぬものであります、之れがために先年將棋新報で「詰むか詰まぬか」と云ふ問題を數回出した事があります、尤も如何にして



詰むか詰まぬか其一 (持駒香)

も防ぎ得られぬ手、即ち分り切つた手で何時までも未練らしく考へて居たり、玉の頭へ金を打たれて一手も動けなくなるまで指して居るのも見苦しいものでありますから詰むか詰まぬか其一 (持駒香) 其處は手のありさうな局面と手の無き局面を見分ける必要もあります、例に依つて「詰むか詰まぬか」の問題一二を出して参考に供します、

詰むか詰まぬか其一 (解釋)

先手●三二歩と打つ●二一玉と遁けるより外なし此時先手●二九香と打つて勝ちのやうですが後手が●二四桂と中間の合駒を打ちますと詰みがありません即ち此二四桂を●同香ならずと取らなくては王手になりま

せんから其通り指しますと後手二、三金間同香ならず一、二玉と遁げて最早や詰み
がありません然るに此二四柱の合を外の駒で合ひをしますと二四歩合ならば同香

詰むか詰まぬか其二 (持駒なし)



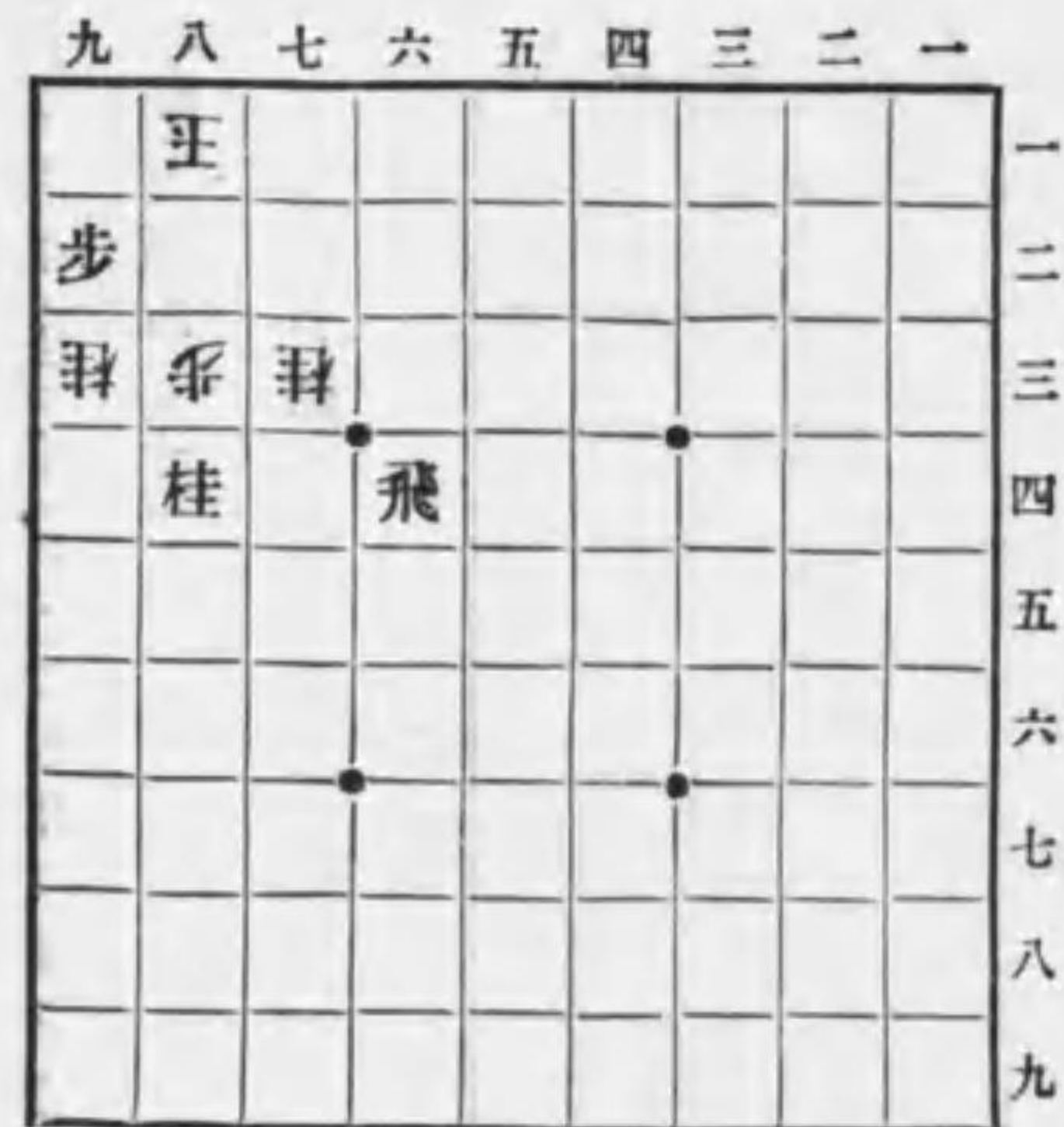
詰むか詰まぬか其三 (持駒なし)
二三金間同香ならず一、二玉と遁げて最早や詰み
同玉二、三香なるで詰みがあり故に二九香
打に對して二四柱と打ち棄て、香車を進ま
せるのが妙手であつて歩でも何でも前へ利
く駒では一二へ打たれるので詰みまず、第
二の問題も之れに似て桂の間駒が眼目であ
ります即ち左の通り
其二(解釋) 先手一八角と成香を取りま
す二七桂飛と中間を致します同角と取
る三六香出ると中間をする同角と取る

四五歩間同角六三柱間で詰みがありません之を直ちに六三柱と間したのでは左
の手順で詰みます。

詰むか詰まぬか其三 (持駒なし)



同八三香同七一玉同八二香なる六六一玉
同七二成香同五一玉同六二成香同四一玉
同五二成香同玉同六三角なる五二玉
同六二とで詰みであります然に本文の通
り數回仲間の合駒をして我駒を捌いて置
くと玉の逃げ處が三一にあつて詰まぬの
であります又最後の六三柱の合駒が金銀
の中では詰みとなるのは三一へ玉が逃げ
た時に同三二香同二一玉と寄つた處で同
一二金か銀と打たれると詰みになります



此の如き手は好く考へないと詰める方も詰まされる方にも失策がありますから將棋は急いで指さずに充分考へて指さなくてはなりません

詰むか詰まぬか其四 (持駒なし)

其三 (解釋)

○九九金打同玉○九六筋 (之を同歩と取れば一一角打にて早く詰む) ○九八金 ○三三角打 ○六六桂間○同角なる ○八九玉 ○九八筋 ○七九玉にて詰みなし然るに ○六六桂の合が外の駒にて詰みとなること 前二題に似たるを以て研究すれば明かになります。

其四 (解釋) 先手○六一飛なる ○七一歩にて歩詰となり詰みなし又先手○七一飛なら

すと指せば ○七一桂合にて詰ます若し七一の間が他の駒では詰みとなる之れも前例に依て研究するのが却て興味あると思ひ一々解釋を致しませんから並べて御覽なさい。

成らずの妙手

前章に六一飛ならずと云ふ事を出しましたが初心の中は敵地へ行くと必ず成るのが利益のやうに考へて輕卒に成るものでありますが無暗に成つて仕舞ひますと歩詰めになつて勝つた將棋を負ける事があります、此云ふ場合には成らずに行つて妙手の出ることがあります其例は伊藤宗印の著に將棋精妙と云ふ書があつて詰將棋百番が出て居ります、本堂の將棋全輯でも之を刊行する豫定となつて居りますが参考のため矢張り前例に依つて四題だけを出します、且つ之れは其例を示すだけでありますから成るべく簡單のものを選びましたのであります。

其一 (解釋) 始めに詰方○二三歩と打つ ○同飛と取る ○三二飛ならずと指す然るに此

處で三三飛なると指しますと一一玉と逃げられて持駒が歩計りですから一二歩打では歩詰めになり外に詰み手がありません故に三三飛ならずと指し二一玉と逃げさせ

其一 (持駒歩三)



三三飛なる三三玉宛一二歩同玉宛一三歩同玉宛一一玉宛二一角なる同飛宛一二歩なる同玉宛一三飛で詰みます。
其二(解釋) 始め詰め方宛四四ると指す之を同銀と取る宛二二飛なる同玉宛二三飛ならずと指す此飛を二三飛なると指すと一一玉と逃げられて一二歩の外に王手がありませんが、それでは歩詰めになりますから二三飛ならずと指し一一玉宛一二歩同玉宛一三飛なる同桂宛二三歩なる一

其二 (持駒歩)



一玉宛一二歩二一玉宛三二角なるで詰みであります。

其三(解釋) 始め詰め方宛九一桂なると指す同玉と取る宛九二歩同玉宛八二銀なる同玉宛八三飛ならずと指す此飛をなるときは九一玉と逃げられて九二歩の外に王手なく歩詰めになりますから八三飛ならずと指し九一玉宛九二歩同玉宛八四桂九一玉宛九三飛なる同角宛九二歩八二玉(八一玉でも)同じ宛七二角なるで詰みであ

ります。
其四(解釋) 始め詰め方宛七三歩ならずと指す之を七三歩なると指すと九三玉と逃げ

玉^先八二^後九四玉^先八三^後九五玉^先九六^後同玉^先八六^後

●二番

三番 (持駒金、金)



先^二九香^後二^三銀^先二^二步^後一^一玉^先一^二步^後同銀^先二^一步^後同銀^先一^二步^後同玉^先二^三香^後一^一玉^先一^二步^後同銀^先二^二と

●三番

先^九五金^後同桂^先七^六る^後八^四玉^先九^四金^後同金^先九^六桂^後八^三玉^先九^四る^後八^二玉^先八^三金^後九^一玉^先九^二步^後八^一玉^先七^二金^後九^二玉^先八^四桂^後九^一玉^先八^一金^後同玉^先七^二る^後九^一玉^先七^三る^後八^二金^先八^三桂^後八^一玉^先七^二桂^後同金^先九^一る

●四番

四番 (持駒角、歩)



先^二四金^後同玉^先四^二角^後三^三步^先同角^後一^三玉^先二^二角^後一^二玉^先一^三步^後二^二玉^先三^二飛^後一^三玉^先二^五桂^打二^四玉^先三^五桂^後二^三玉^先一^五桂^後同香^先三^三と^後一^二玉^先一^五香^後二^一玉^先二^二香^後(角餘る)

●五番

先^四二銀^後同銀^先五^二金^後三^二玉^先四^二金^後二^二玉^先三^四桂^後同歩^後三^一銀^後一^二玉^先二^二金^後一^三玉^先二^三金^後同玉^先二^四步^後一^三玉^先二^二銀^打一^二玉^先一^一銀^後同玉^先一^二步^後同玉^先二^三步^後同玉^先二^九香^後一^三玉^先二^二銀^後一^二玉^先二^一銀^後一^一



五番 (持駒金、金、銀、銀、桂、歩)



六番 (持駒角)

玉(先)二二香(ナ)同玉(先)三三金(先)一三玉(先)二五桂(先)二三玉(先)三三金

●六番



七番 (飛、角)

先八二飛(先)三三桂合(先)三一角(先)二三玉(先)三三飛(先)同玉(先)四二と(先)二三玉(先)三五桂(先)一
二玉(先)一三歩(ナ) (此詰もの別に右方に詰手あるべきも本文になし)

●七番

先一四飛(先)同歩(先)四六角(先)三五桂(先)同桂(先)
一三玉(先)三三桂(先)一二玉(先)一三歩(先)同桂(先)
同角(先)同玉(先)二五桂(先)一二玉(先)二四桂打(先)
同歩(先)一三桂(先)二一玉(先)二三桂(先)二二銀上
先三三桂(先)三一玉(先)四一桂(先)同玉(先)四三桂
先四二歩(先)五二金打(先)三一玉(先)四二金(先)二
一玉(先)三三金(先)一二玉(先)二二金(先)同玉(先)二
三銀打(先)一三玉(先)三二銀(先)歩餘る)

●八番

先六二香同玉先七三桂先五二玉先五二香先四二玉先三二銀左先四三玉先四四香

●九 番

八番 (持駒なし)



九番 (持駒角、桂)



先四二飛同玉先五二角同玉先四二金先六一玉先七三桂打同金先同桂同先五

一 金

十番 (持駒金、金)



●十 番

先八一步先七二金先八三金打同玉先九四
金打先七三玉先八四金先六二玉先七二る
同玉先六四桂先六三玉先六二飛打同玉先
七三金打先六一玉先七二金

以上にて序盤より終局までの種々の要
點を講述し了りましたから之れより始
めに説きし如く定跡大要を知らしむる
ため其種別を掲げる順序に致します。

定跡通例

定跡は若し一手二手の變化を異にしたものを數へる時は幾干に至るかは不明であつて之れ等は本堂發行の將棋全輯に就くを完全とするも今初心者が定跡と云ふものを知らんとする手引のため各種につきて其一二づゝを掲載す。

六枚落 (駒落將棋は何れも上手より指始む)

○四八金 ○三四歩 ○六八玉 ○四四角 ○二八銀 ○一四歩 ○三六歩 ○一五歩 ○四六歩 ○五四歩 ○三七金 ○一六歩 ○同歩 ○同香 ○二六金 ○一二飛 ○一五歩 ○二六角 ○同歩 ○一八香 ○三七銀 ○一五飛 ○七六歩 ○一七飛 ○四八銀 ○二八聖 ○五八金 ○三八聖 ○四七銀 ○三七聖 ○五六銀 ○一八花 ○七八銀 ○四八聖 ○六九銀 ○五八聖 ○同銀 ○七八金 ○打 ○同玉 ○五八花 ○六八金 ○六九銀 ○七七玉 ○六八花 ○にて下手勝也

(イ) ○六八金の處 ○六八香 ○八八銀 ○六六角 ○七九金 ○八八玉 ○六八花 ○九變化

二歩銀金 駒持手下

九	八	七	六	五	四	三	二	一
星	将	將	王	将	将	将	将	
	将	将		将	将			
				将	将			
		歩		歩	歩	歩		
			歩					
	歩		歩					
		玉		將				

(圖は五八花の處)

桂金角 駒持手上

(土居曰) 圖面の場合上手が六八香と合駒を打つた場合、下手ボンヤリと八八銀と打つて必死を掛けたのは妙手にして、之にて凌ぎなし。

九玉 ○九八香 打 にも下手勝也
 又(イ) 六八金の處 七七玉と逃げれば
 ○五七花にてよろし 又 ○六六角の處
 ○八八玉ならば ○六八花 ○七八銀
 七七金にてよろし

五枚落 (左桂落)

○八八銀 ○九四歩 ○七八金 ○九五歩 ○八六歩 ○八四歩 ○八七金 ○七二銀 ○五八金 ○八三銀 ○七六歩 ○三四歩 ○七七銀 ○七四銀 ○六六歩 ○八五歩 ○六七金 ○八六歩 ○同銀 ○六四歩 ○五六歩 ○六五歩 ○五五歩 ○同角 ○五六金 ○三三角

歩 駒持手下



(圖は六四の處)

歩 駒持手上

(土居曰) 下手八筋より急激を断念し、八、六兩筋より聯絡を保ちつゝ、徐に攻勢を執らんとの意味で六四歩と突出したのは輕妙なる手段である。

- 五五歩 ○二四角 ○四六歩 ○六六歩 ○
- 五八玉 ○六二飛 ○七七金 ○八五歩 ○七
- 五銀 ○同銀 ○同歩 ○六七銀 ○四七玉 ○
- 五六銀 ○同玉 ○六五金 ○四七玉 ○五五
- 金 ○五八銀 ○四六金 ○四八玉 ○六七歩
- 同銀 ○同飛 ○同金 ○四七銀 ○五九玉
- 五七金にて下手吉

變化 (イ) ○五六歩の處 ○七七金右

- 八五歩 ○七五銀 ○同銀 ○同歩 ○八
- 六歩 ○同金左 ○六六角 ○六八玉 ○七
- 七角 ○同玉 ○六六金 ○同玉 ○八六飛
- にて下手吉

(圖は一四飛の處)

しな 駒持手下



しな 駒持手上

(土居曰) 下手敵が二枚金を利用して、左右の弱味を極力防禦した際、飛車を自由に運用して敵金を釣上げ然して一筋の弱味より攻勢を執りし手段妙なり。

四枚落 (兩桂)

- 四八銀 ○九四歩 ○五六歩 ○九五歩 ○
- 五七銀 ○九二飛 ○七八金 ○九六歩 ○同
- 歩 ○同飛 ○九七歩 ○九四飛 ○八八金 ○
- 九三桂 ○八六歩 ○八四飛 ○八七金 ○一
- 四歩 ○三八金 ○一五歩 ○二八金 ○九八
- 歩 ○八八銀 ○一四飛 ○六六歩 ○一六歩
- 同歩 ○同飛 ○一七歩 ○一四飛 ○四六
- 歩 ○一三桂 ○二六歩 ○二四飛 ○二七金
- 一八歩 ○三六歩 ○一九歩 ○三七桂 ○
- 一八と ○一六歩 ○二八と ○一七金 ○三

八とにて下手吉

變化

(イ) 六六歩の處上手方 四八玉 一六歩 同歩 同飛 一七歩 一四飛 四六歩 一三桂 二六歩 二四飛 二七金 一八歩 三六歩 一九歩 三七桂 一八と 一六歩 二八と 一七金 三二銀 六六歩 五四歩 四七玉 三一角 四五歩 五三角 三五歩 同角 四六銀 二六角 にて下手吉

一枚落 (飛車角行落) (五七金の指し方)

四八銀 三四歩 五六歩 六四歩 五八金 右 六五歩 五七金 七四歩 四六金 六二飛 五七銀 七二銀 六八銀 上 七三銀 四五金 六四銀 四八玉 五二金 右 七八金 三二金 二六歩 四一玉 二五歩 四二銀 四六銀 六六歩 同歩 同角 五七銀 引 八四角 六六歩 六五歩 八六歩 九四歩 八五歩 九三角 六五歩 同銀 五八玉 六六銀 四六銀 六七歩 五九銀 引 三三桂 三四金 四五桂 四八銀 五七桂 同銀 同銀 同銀 六九銀 四八玉 六八歩 なるにて下手よし

しな 駒持手下

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香			金	王	銀	桂	角	香
	歩	歩	桂	銀	歩		歩	
			飛			歩		
				歩				
					歩	金	歩	
	歩	歩	歩	銀	歩			
		銀	玉	金				
香	桂						桂	香

(圖は六三銀の處)

しな 駒持手上

同 (五七銀の指し方)
 四八銀 三四歩 五六歩 六四歩 五七銀 六五歩 六八玉 七四歩 七五銀 七六歩 八八銀 七二飛 六八金 七六歩 同歩 同飛 七七歩 七四飛 三八金 七三桂 三六歩 七二銀 三七金 六三銀 二六歩 五二金 右 四六金 五四歩 一六歩 一四歩 二五歩 三二金 三七桂 四一玉 二四歩 同歩 三五歩 同歩 同金 三八歩 四八銀 六六歩 同歩 三九歩 五七銀 三八と 四四五桂 三七と

(土居曰) 上手愚圖々してゐては、敵陣堅固になり、攻守共に困難になるを以て、三筋より挑戦した場合、下手は三八歩と打つて成歩を作る趣向に出たのは大によろし、次に圖面の場合上手が四六金と上らば、下手は軽く三五歩とつき同金、三三桂の趣向を取りしは妙なり。

△三三歩△同桂△同桂△同角△四四角△四二角△三四歩△二一桂△六六七金△四七と△六八銀△六四角にて下手よし

變化 (イ) △二六歩の處上手△四六金△三五歩△同歩△二四飛にても下手よし

飛香落 (飛車と左香車を落す)

△七六歩△三四歩△六六歩△九四歩△七八金△九五歩△六八銀△九二飛△六七銀△九六歩△同歩△同飛△九七歩△九二飛△五六歩△六四歩△七七角△六二銀△四八玉△六三銀△三八玉△五四銀△四八銀△六二飛△七五歩△四二金△五七銀△四一玉△四八金△三二玉△四六銀△五二金上△五七金△九八歩△一六歩△一四歩△三六歩△六五歩△同歩△七七角△同桂△四四歩△五五歩△四三銀△七四歩△同歩△六四歩△九九歩△六五桂△八九と△七三歩△九二飛△六三角△六二歩△八一角△九七飛△七二歩△九八歩△六二と△同金△六三歩△七九と△九九歩△同桂△六八金△六九と△五八金△五九と△四八金△四九角△三七玉△六七角△同金△五八と△同金△三七歩△三八桂△二八銀



(圖は△五九との處)

(土居曰) 下手香落の弱味より徐に攻勢の方針を取り成歩を作り、次第に利用策を講じたのは穩健なる好手段である、既に成歩を作つた際は、其成歩を遊び駒にせぬ工夫肝要である。

△二六玉△二九桂にて下手よし總じて飛香落は下手九八歩打が妙手也

變化 (イ) △四八金の處上手△六二と△六六歩△同銀△五八と△同金△三九角△四八金△二八金△三七玉△二九金にても下手よし

又 (ロ) △三七玉の處上手△二八玉△八八桂△五八桂△六六歩△四九金△同と△六六金△四八と△六二と△七九桂△三八金△四九桂にても下手よし

飛車落 (七七角と出るを角留と云ひ七七桂と上るを桂留と云ふ之は角留也)



(圖は四九銀打の處)

(土居曰) 上手普通に對戦しては、駒落の弱味自然に累を生じ不利の局面になるを以て、紛れを作る意味で五五歩と開戦した場合、下手は敵の五五角打を妨ぐる意で軽く三三角と引き、然して六六歩と打ち敵が同銀と捕つた際七三桂跳輕妙である、尙飛車を犠牲にして敵玉へ肉薄したのは面白い攻撃法である。

三步桂飛 駒持手上

- 四七六歩 三四歩 六六歩 六四歩
- 七八金 六二銀 六八銀 六三銀 六
- 七銀 五四銀 五六歩 六二飛 五八
- 金 七四歩 四八玉 五二金右 三八
- 玉 四二玉 四八銀 三二銀 五七銀
- 二四歩 一六歩 一四歩 四六銀
- 二三銀 五七金 三二玉 七七角 四
- 二金上 五五歩 同銀 同銀 同角
- 六五歩 三三角 六四歩 五五銀 六
- 五銀 六六歩 同銀 七三桂 七四銀
- 六四飛 七三銀 六六銀 同金 同
- 飛 六七銀 同飛 同金 五八銀 六

六金 四九銀打 四八玉 六五歩 五五金 五四歩 同金 七七角 同桂 三九角打

變化 (イ) 四八玉の處上手 二八玉 六五歩 五五金 五四歩 同金 七七角

同桂 三九角 一八玉 三八銀にて下手勝也

但し上手五五歩の仕懸け無理なり

同 (桂留の定跡)

- 四七六歩 三四歩 六六歩 六四歩 七八金 六二銀 六八銀 六三銀 六七銀 五
- 四銀 五六歩 六二飛 七八桂 七四歩 五八金 五二金右 四八玉 四二玉 三八
- 玉 三二銀 四八銀 一四歩 一六歩 七三桂 七九角 四五銀 五七銀 二四歩
- 四六歩 五四銀 八八角 二三銀 三六歩 三二玉 四七金 四二金上 三七桂 九
- 四歩 九六歩 八四歩 二六歩 三三角 四五歩 六一飛 四六銀 六五歩 同桂
- 同桂 八六歩 七七桂打 六五歩 同銀 七七金 六六歩 七八銀 七六銀 同金
- 六七歩にて下手よし



(圖は六飛の處)

(土居曰) 下手圖面の場合敵が八六歩とついで、六筋を極力防禦して来た場合六五歩と開戦し、以下銀桂を交換し其桂を利用して攻撃を持続した趣向大によるし

變化 (イ) 四六銀の處上手 八六歩 六五歩 同桂 同銀 同歩 八八角 同金 六五桂 六六銀 右 五四桂 五五銀 打 六六桂 同銀 引 三五歩 四六角 三六歩 同金 五七銀 五五角 六六銀 同銀 五七桂 にて 下手よし

角行落

(左玉の圍ひあり右玉を銀冠と云ふ此定跡之れ也)

四八銀 三四歩 五六歩 五四歩 二六歩 三二銀 二五歩 三三銀 三八金 四四歩 四六歩 四三銀 一六歩 一四歩 三六歩 三二飛 六八銀



(圖は八二玉の處)

(土居曰) 下手圖面の場合敵が金、飛車を自由に活動なさんとの方針を取つて来た場合、他迄敵金を壓迫し逆襲の方針を取つたのは活氣ある妙手段である。

五二金 左 五七銀 左 六二玉 六六歩 六四歩 六八金 七二銀 五八玉 七一玉 七六歩 七四歩 九六歩 九四歩 三七桂 五一角 四七玉 八四歩 二九飛 六三金 七七金 八三銀 八六金 八二玉 七五歩 七二飛 七九飛 八五歩 同金 七五歩 六五歩 同歩 七五飛 七四銀 同金 同金 七九飛 六四金 打 七六歩 七五歩 同歩 同金 七三歩 同玉 七六歩 七四金 引 八六銀 六三玉 七七桂 八二飛 二七金 八四角 二六

金七五歩同歩同角同銀同金にて下手よし
 變化 (イ) 同七五歩の處上手方同七九飛同七二飛同七五歩 (ロ) 八五歩同七六金同七五歩同金同八六歩同歩同八八歩にても下手吉
 又 (ロ) 同七五歩の處上手方同二七金同三三桂同二六金同二二飛同七五歩同歩同金同七四歩同七六金同七二金同六九飛同七三桂同七七桂同六二角同六五歩同歩同桂同六四歩同七三桂同金上同六七桂同四五歩同三五歩同歩同四五歩同三四桂同二七金同二四歩同七五歩同二五歩同七四歩同銀にても下手よし (上手銀にて玉將を圍ふゆる銀象筋と云ふ)
 同 (下手左玉の圍即ち矢倉掛り)
 同四八銀同三四歩同五五歩同五四歩同四六歩同四四歩同二六歩同三二銀同二五歩同三三銀同三六歩同五二金同石同三八金同四二玉同五七銀同三二玉同六八玉同三一角同七八玉同四三金同六八金同二二玉同三七金同三二金同二六金同六二金同一六歩同七四歩同

三歩 駒持手下

九	八	七	六	五	四	三	二	一
星	将					馬	将	星
		飛				馬	将	飛
			歩	歩	歩	歩	歩	歩
						金	桂	
		歩	歩	銀	銀			
				金				
		歩	銀	玉				
							飛	
香	桂							香

三歩 駒持手上

(土居曰) 下手六五歩の挑戦以下桂を利用して、其筋の位を占め、然して角を手順に活動せし趣向は大にありし。

六六歩同六四歩同七六歩同八四歩同六七金同八五歩同八八銀同九四歩同九六歩同六三銀同一五歩同八六歩同歩同飛同八七歩同八二飛同三五歩同歩同金同三四歩同三六金同七二飛同七七銀同七五歩同歩同飛同七六歩同七二飛同三七桂同七四銀同四五歩同歩同金同四四歩同四六金同六五歩同歩同七三桂同六六銀右同六五桂同六八銀同七歩同同桂同同桂同銀上同六五歩同五七銀同六四角同二九飛同四五桂同桂同歩同金同四四歩同四六金同四五桂にて下手よし

變化 (イ) 先同金の處上手先四五桂 四四銀 二四步 同步先二五步 三五步 先四
 六金 二五步 先同飛 二二三步 打にても下手よし
 又 (ロ) 先二九飛の處上手先五五步 同步先二六飛 五四桂 四七金 六六步 先六
 八金 六五銀 八八桂 九五步 先同歩 九八步 先同香 九七步 にても下手よし

左香車落 (右香車落は現今指す人なきを以て略す)

先七六步 三四步 先六六步 八四步 先七五步 八五步 先七七角 六二銀 先七八飛 五
 二金 右先六八銀 四二玉 先五八金 左先三二玉 先四八玉 先九四步 先三八玉 先九五步 先二
 八玉 先一四步 先一六步 先九二飛 先九八飛 先九四飛 先六七銀 先六四步 先三八銀 先七四步
 先同歩 先同飛 先七六步 先六五步 先六八飛 先九六步 先同歩 先同桂 先九六步 先九八
 飛 先六六步 先同銀 先八六步 先同歩 先九四飛 先九九香 打先九七步 先同飛 先同飛 先同香
 六五步 にても下手よし

變化 (イ) 先九八飛の處上手先七四步 同步先六五步 八二飛 先二二角 先同銀 先七
 四飛 先七三歩 先三四飛 先三三銀 先三六飛 先四五角 先五六飛 先同角 先同歩 先六九飛 先



(圖は先九二飛の處)

土居曰 九二飛の型は些か緩漫の嫌ひあり、ために
 現在は餘り應用せざるも、比較的穩健なる策である下
 手九二飛の場合敵七二歩と挑戦して來た際、八二飛と
 戻り以下の應手大によろし。

三八銀 八九飛 にても下手方よし
 又 (ロ) 先六四歩の處下手先七四步
 先同歩 先同飛 先七八飛 先七五歩 先三
 八銀 先九六歩 先同歩 先同香 先九七步
 先同香 先同桂 先九六歩 先九八歩 先九
 七步 先同歩 先六四歩 先五六歩 先七三
 桂 先六八角 先六五歩 先五七角 先五四
 桂 打にても下手方吉

平手 (平手の定跡は最も多きも現今多
 く指すものを出して一例を示す)

居飛車四間 (先手居飛車)
 先七六歩 三四歩 先二六歩 四四歩 先
 二五歩 三三歩 先四八銀 三二銀 先六

歩 駒持手後

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂		香					香
	王	銀		香				
	歩	歩	歩	角	歩	歩		
歩				歩		飛		歩
		歩	歩			銀	桂	
	飛	銀		歩				
		角			歩	歩	歩	香
				金		銀	玉	
香	桂			金			桂	

(圖は 二五桂の處)

(土居曰) 双方美濃圍なるも、先手方飛車の据へ場所よろしからず、然して桂の利用を逸せしは失策である。先手敵の一七歩打に對し同香と指した爲守勢に陥つた其ま、捨て置いて九五歩と攻勢を探るべし。

歩歩 駒持手先

- 美濃圍 (双方美濃)
- ⑦七六歩 ⑧三四歩 ⑨六六歩 ⑩三五歩 ⑪七八銀 ⑫三二飛 ⑬五六歩 ⑭三六歩 ⑮同歩 ⑯同飛 ⑰六七銀 ⑱三四飛 ⑲三七歩 ⑳六二玉 ㉑七七角 ㉒七二玉 ㉓八八飛 ㉔八二玉 ㉕八六歩 ㉖七二銀 ㉗八五歩 ㉘九九歩 ㉙九六歩 ㉚五二金 ㉛左 ㉜四八玉 ㉝四二銀 ㉞三八銀 ㉟一四歩 ㊱一六歩 ㊲五四歩 ㊳八四歩 ㊴同歩 ㊵同飛 ㊶八三歩 ㊷八八飛 ㊸五三銀 ㊹五八金 ㊺左 ㊻四四銀 ㊼三九五 ㊽三三桂 ㊾七五歩 ㊿三一角 〇七六銀 〇五三角 〇二八玉 〇三五銀 〇六五歩

角 駒持手後

九	八	七	六	五	四	三	二	一
香	桂		香					香
	王	銀		飛				
	歩	歩	歩	歩		歩	歩	
歩						歩		歩
		歩	歩		歩		歩	
		歩		歩		桂		
	角	玉		金	銀			
香	桂	銀	金					香

(圖は 八八角打の處)

(土居曰) 元來四間飛車は敵の仕懸けを待つ駒組なるが本局は後手四五歩の強手の下に攻勢的の方針を取つた、其時先手は一旦八角と打ち以下三、四兩筋の歩を突捨て桂を犠牲にして三四歩打の趣向大に面白し。

しな 駒持手先

- 八玉 ④四二飛 ⑤七八玉 ⑥六二玉 ⑦五八金 ⑧七二玉 ⑨九六歩 ⑩九四歩 ⑪一六歩 ⑫一四歩 ⑬五六歩 ⑭五二金 ⑮左 ⑯三六歩 ⑰八二玉 ⑱三七桂 ⑲七二銀 ⑳二六飛 ㉑四五歩 ㉒三三角 ㉓同銀 ㉔八八角 ㉕六四歩 ㉖二四歩 ㉗同歩 ㉘三五歩 ㉙同歩 ㉚四五桂 ㉛同飛 ㉜三四歩 ㉝同銀 ㉞二四飛 ㉟先手よし
- 變化 (イ) 後手 ⑥六四歩の處 ④四六歩 ⑤同歩 ⑥同飛 ⑦二四歩 ⑧同歩 ⑨二二歩 ⑩三五歩 ⑪二二歩にて先手よし



(土居曰) 袖飛車は面白い戦法なるも、斯く一本調子に七筋より攻勢を採つては却つて自己の八筋へ破綻を招く恐れあり、先手方敵が袖飛車の構へに來た場合は本譜の如く早く引角にして交換を挑むべし。

- (圖は七二飛の處)
- 七九角 六六角 同飛 七五金にて後手よし總じて石田組は先手が後手になり指し悪きを以て高段者は好んで指さず
- 袖飛車 (後手袖飛車)
- 七六歩 三四歩 二六歩 四四歩 二五歩 三三角 四八銀 三二銀 五六歩 五四歩 三六歩 四三銀 六八玉 六二銀 七八玉 五三銀 六八銀 七四歩 五八金 七五歩 同歩 六四銀 七七銀 七二飛 七九角 七五銀 二四歩 同歩 同角 同角 同飛

- 四二金 九五歩 同歩 九四歩 一五歩 同歩 一七歩 同香 二五桂 一六香 三六歩 同歩 同銀 三七歩 一七角 同桂 三七銀 三九玉 一七桂 四八金上 二八金にて後手よし
- 變化 (イ) 一六香の處 二二角 一七桂 同桂 一六歩 二三玉 一七歩 同玉
- 二四飛 同歩 同銀 二八玉 四四角にて後手よし
- 石田組 (先手石田)
- 七六歩 三四歩 七五歩 六二銀 七八飛 六四歩 七六飛 六三銀 六六歩 五四歩 七八銀 四二玉 四八玉 三二玉 三八玉 四二銀 五八金 左八四歩 九六歩 九四歩 一六歩 一四歩 二八玉 八五歩 三八銀 七二金 六七銀 八三金 九七角 五三銀 七七桂 四二金 五六銀 八四金 六五歩 同歩 同銀 六四歩 五六銀 四四歩 四六歩 七二飛 四五歩 五五歩 同銀 四五歩 五六歩 五四歩 六六銀 七四歩 同歩 同銀 七五歩 六三銀 四七金 九五歩 同歩 九六歩

しな 駒持手後

	九	八	七	六	五	四	三	二	一	
九	星							桂	香	一
八		王	金					飛		二
七		歩	桂	歩	歩	歩	歩	歩		三
六			歩	歩	歩	歩	歩	歩		四
五				歩	歩	銀	桂	歩		五
四										六
三										七
二										八
一										九
	香	桂	金	銀	歩	桂	飛	香		

(圖は四四の歩の處)

(土居曰) 向飛車は持久戦の棋質を備へ、後手方の執るべき良策なるも、本局の如く敵に四筋攻める手懸りを作らしては面白からず、敵の六六歩に對し六三金早計なり、五一角と引き豫防すべし、先手四、六兩筋より聯絡を保ちつ、攻勢を執つたのは大によろし。

歩 駒持手先

金(ロ) 二四歩 同歩 三一角にて下手吉
 變化 (イ) 同角の處後手 同銀右
 四四五歩 五七銀 三三角 同桂
 八八角 四二銀 四四歩 五二銀
 四五桂にても先手よし
 又 (ロ) 同金の處後手 六二金
 二四歩 同歩 二三歩 同飛 四一角
 以上は平手普通定跡の一例を出す
 もの也但し相懸り及び矢倉組は常に多く指す駒組なれども前章の實例中に出したれば略す

二二歩 二三歩 七六歩 八八銀 三二金 二二歩 同金 七三歩 八二飛 七二角 二三歩 六一角 同玉 二五飛 六四角 七二金 同飛 同歩 同玉 七四飛 七三金 七五飛 廻るにて先手よし

變化

(イ) 七九角の時後手直ちに 七五銀 悪しく一旦 三二金 二四歩 同歩 同角 同角 同飛 二三歩 二六飛 七五銀と指すが常なり後手の袖飛車に對し先手は早く角を引き替るが定跡也

向飛車 (後手向飛車)

七六歩 三四歩 二六歩 四四歩 二五歩 三三角 四八銀 三二銀 五六歩 五四歩 五八金 右 四三銀 六八玉 二二飛 七八玉 六二銀 三六歩 五三銀 三七桂 六二玉 九六歩 九四歩 一六歩 七二玉 四四歩 五二金 左 四七銀 六四歩 六六歩 六三金 六八銀 七四歩 四四歩 八二玉 六六銀 七二金 二九飛 七三桂 四六銀 五一角 六五歩 三三角 四四歩 同角 同角 同銀 右 六四歩 同

素人好きの指し方

始めに下手の中飛車と云ふ話をいたしました。素人は兎角中飛車を好み又受ける方でも之れに弱はらせて居るのを見受けますが先手で中飛車を指すと云ふことは本職の棋師は殆んど指しません、此外に棒銀と云ふのも素人が好んで指し之れを受ける方も困つて居るのがあります。之れは一名馬鹿銀と云ふ位で棋師の指したのは殆んど見受けません、又始めから角を取りかへて四五から打ち込む筋違角と云ふのも素人の好む手でありすが之も損の手でありますから本職の棋師は指すことが稀れであります、斯く中飛車、棒銀、筋違角は素人の好む手であつても實は定跡に無いか先手が損とか云ふ指し方でありすが之れより此三手段の利害に就て講演致すことにします。

中飛車 (先手)

先手 ⑦七六歩と指す後手 ⑧三四歩と指しますのは何の將棋でも平手は大抵此手を指します。之れは始めに云つて置いた通り角道を明けるのは一番早く敵陣まで見通すためです。次に先手が居飛車で堂々と定跡に基ひて指しますならば、二六歩と飛車先きの歩を突くのが本筋であります。之れは中飛車で指さうと云ふ考へであります。⑨五六歩と突きます。此時後手は受けなくてはなりませんから負けずに⑩五四歩と指します。敵が下手の中飛車で来るから我は堂々と居飛車で指すと云ふので此五四歩を受けます。次に八四歩と飛車先の歩を突ひて居たのでは先手に五五歩と突き出されて中央の位を占められます。後手は受けるのが自然の理であります。矢張り五四歩と突くのが當然であります。次に先手は目的通りに⑪五八飛と中飛車に廻ります。後手も據なく⑫五二飛と中飛車に廻つて受ける事もあります。後手の中飛車は受けるためであります。から下手の中飛車とは申されませんが之れは別の話として此では他の手で中飛車を受取る考へで後手 ⑬六二銀と上ります。⑭四八玉は居玉では中央の戦ひには危険であります。

から右方へ圍ふため斯く指したのであります後手も同様四二玉と上るのは居玉では危峻ゆる之れを圍ふためであつて飛車を動かすに居ますから後手は左方へ圍ふのであります、(先)三八玉(先)三二玉は前意の如く玉を圍ふために指したのであります先手(先)四八銀は此銀を戦線へ繰り上つて中飛の先きを助けて攻勢に出んとするのであります、後手(先)五二金右は中央を守り且つ玉の圍ひをつけたのであります之れを定跡の名では雁木と申します(先)二八玉と寄つて益々圍ひの手段に入ります(先)八八角と指し(先)同銀と指します元來先手が始めに角を替はるのは一手損としてありますが之れは先手が中飛車と云ふ定跡に無い手を指して來ましたから後手は後に角の打ち込み場がありと考へまして此角を替はつたので之れは不都合ではありません、此で後手は反對に先手の形となりましたから堂々と飛車先きの歩を進めるため(先)八四歩と突く(先)七七銀と出で飛先きを防ぐ後手(先)八五歩の次に先手(先)一六歩はまだ戦期が熟しませんから此歩を突ひて玉將の通路を開き兼ねて端より攻め込む含みをも持つて居ります後手(先)一四歩も

位取り傍々先手と同意味に玉の道を廣くしたのであります(先)三八金で玉の圍ひが出來(先)二二銀と上つて玉頭を守らんとします(先)九六歩(先)九四歩は互ひの位取り(先)五五歩(先)同歩(先)同飛は中央に手がかりをつけるため(先)九五歩も先手を取つて攻勢に出んとするため先手之を棄て置きては益々攻進されますから(先)同歩と取る(先)八六歩と突き捨てる之を先手同銀と取ると四四角と打たれて飛車を逃げれば角に成られますから八六歩は同歩と取ります(先)九八歩と打つ之を同香と取れば八七角打で金取れ香取れになりますから取ることは出來ません然りとて先手では別に仕懸ける手もありませんで結局後手のために九九歩なると香車を取られてと金を作られますので互格の力では先手は勝てませんから中飛車の不利は之れだけでもお分りになります。以上は先手が二十五手目に五五歩と指した手順でありますが若し又此五五歩を止めて他の手を指して見たらば如何と申しますと左の如き手段となります。前記の二十五手目先手五五歩を止め(先)五七銀と上り攻進の準備をする後手も(先)三三銀

九四歩の圖面 (持駒双方角)

九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇	将			歩		王	将	皇
	飛		飛	歩		歩	歩	
		歩	歩		歩			歩
歩				歩				
	歩					歩	歩	
		歩	銀	歩		歩	玉	
				飛	銀	金		
香	桂		金				桂	香

とが出来て有利でありますのに反し先手の中飛車は一向働きが付きません。
又圖面の時に \ominus 五七銀 \ominus 三三銀 \ominus 四六銀 \ominus 四四銀と指して後に五五歩と仕懸けずに先

と上つて防禦の手段を講じます \ominus 四六銀 \ominus 四四銀は互ひに五筋の戦ひに参加するためであり、前局では先手却つて後手となつて端から崩されましたから今度は先手から仕懸ける考へで \ominus 五五歩 \ominus 同歩 \ominus 同銀 \ominus 同銀 \ominus 同飛と銀を手に持つて指しますが後手は矢張り先手を取るため \ominus 四四銀と打つ \ominus 五八飛と退却は已むを得ません \ominus 四二金上り玉を堅固にして居て此後矢張り後手方は飛先きと端し歩を利用して攻勢に出るこ

手 \ominus 五九金と指して此遊び金を玉の方へ持つて參りますのは玉の傍は一枚金では手薄いから二枚金で守るためであり、後手も矢張り \ominus 四二金と上つて玉の守りを固くします \ominus 四八金左と上りいよ、玉の守りをつける後手 \ominus 五三銀右と上つて五筋の防備を堅固にする此で先手は玉の圍ひが固くなつたから中飛車の目的で \ominus 五五歩と突く \ominus 同歩 \ominus 同銀 \ominus 同銀 \ominus 同飛で後手は \ominus 七八角と打ち左右何れでも成らうと指します先手は此角成りを防げませんから之れは棄て置いて \ominus 五五歩と打ちます後手は \ominus 四四銀と上る手もあり、若し先手に強く七一角と打たれ飛車を逃げれば \ominus 四四角と切られ同歩と取つた時に \ominus 五三銀と打ち込まれては陣中が亂れますから此銀は \ominus 四四上らず \ominus 六四銀と上ります先手は矢張り \ominus 七一角と打つ \ominus 七二飛と寄る \ominus 五三歩なる \ominus 五五銀 \ominus 四二と \ominus 同金 \ominus 二六角なる \ominus 四四銀と引く \ominus 三六ると指せば \ominus 五二飛にて先手は歩切れとなり矢張り後手方が指し好い將棋であります。
又前記の後手が \ominus 五五銀と飛車を取つた時に先手 \ominus 四二とと指さずに \ominus 五二とと右の金を

取つて同金と指させて敵の金を玉より離して指させ六銀七飛五二銀なる
七二飛四二金打二二玉八三金五二飛同金四四銀引くと指し先手は敵陣
を荒したゞけで最早や指し切り將棋でありますが之れに反し後手は八九角なるでも六
七角なるでも其後色々の手がありましたして結局後手方の勝であります。

其二

モ一一つ先手中飛車の不利の講演を致しますと始めの七六歩三四歩五五六歩五
四歩五八飛六二銀までは前局と同じでありますが此次に前局では四八玉と玉を圍
ひましたが今度は七七角と出て後手から同角と指せば同桂で手徳をせんと指します
と後手は此で角を替はつては桂を上られるだけ損でありますから四二玉と指して模
様を見ます四八玉は敵が七七角と替はる手段に乗つて來ませんから我も亦玉を安全
の處に移すのであります三二玉三三玉五二金右六八銀五三銀五七銀四
四銀四六銀八四歩と互ひに陣形が出来ましたから先手は矢張り中飛車の目的を達

せんとして五五歩と仕懸ける同歩同銀同銀の時に今度は同飛と取らずに同
角と取り同角同飛四四角五八飛九九角なると指し先手五五歩打四二金
よる五二銀打一寸面白いやうでありますが後手に五五香の手がありますから矢
張り中飛車の効能がなく後手が指し能くなります、元來將棋は先手が指し好き筈であ
りますのに斯く先手の不利となるのは中飛車に廻るため手損をした爲めであります。

棒銀 (一名馬鹿銀)

素人が好んで指す將棋に中飛車に次で棒銀と云ふのがあります即ち右の銀を飛車先き
から棒に上つて行くので此名があります此銀は實は無定跡で効能のないものでありま
すから一名を馬鹿銀と申します、然るに素人は此受け方が悪いので却つて之れに惱ま
される人がありますから此に講述致します。

扱七六歩三四歩は誰でも指します次に先手二六歩と指すのは居飛車の指し方で
法に適して居ますから後手も此で八四歩と相懸りに指すか四四歩と角道を留めて四間

飛車に指せば本筋でありますが棒銀を恐れるため▲三二金と上る▲二五歩と指す此時
 後手は三三角と出て飛車先きの歩を替はらせぬ指し方もありますが▲四二銀と上つて
 次に三三へ上らうとします此時先手は二二角なると角を替はり同金と取らせ敵の金を
 逆にさせる手もあり又二四歩と歩を替はる指し方もありますが先手は棒銀の目的であ
 りますから▲三八銀と上ります▲三三銀と上る▲二七銀と出る▲八四歩▲二六銀と棒
 銀と出る▲八五歩▲七八金▲七二銀▲三六歩▲八三銀と之れも飛先きの歩を替はる利
 益を知らずに負けずに棒銀に上る▲三五歩と突く▲同歩▲同銀▲三四歩▲二四歩▲同
 歩と取る▲同銀▲同銀▲同飛▲二三歩▲二八飛と斯なつては先手は手に二枚歩と銀を
 持ち且つ飛先きの歩を替はつて居るから非常の利益で棒銀の効能は偉大であるから素
 人連の棒銀を恐れるのも無理のないやうであります之れは後手方の受けやうが悪い
 からであります之を本筋に受けければ少しも恐れる事はないのでありますから左に其
 手順を出します。

▲七六歩▲三四歩▲二六歩▲八四歩▲二五歩▲八五歩▲七八金▲八六歩▲同歩▲同飛
 ▲八七歩▲八四飛▲三八銀▲三二金▲二七銀▲六二銀▲二六銀▲三三角▲三六歩▲二
 二銀▲三五歩▲五四歩▲三四歩▲四二角▲三五銀▲六四角と出て先手一八飛と指して
 は此飛車が隠居になりますから折角出た銀を▲六四銀と引きます、此の通り銀を引
 ひては棒銀も無効となり後手は却つて角を捌ひて居て先手に廻つて後手から此後は玉
 を圍つて堅固に指しても宜しく又三四に居る敵の歩が目障りとなつて居るから▲三三
 歩▲同歩なる▲同銀と指して姿を好くする手もあります其時先手が又も▲三四歩と打
 ては今度は▲四四銀と上つて充分の位勝ちとなります、トモカク後手は棒銀に對し飛
 先の歩を替はらせぬため三三角と上る手順がよろしいのでありますのに兎角三三銀と
 上つて受けやうと考へてのみ居て角を六四へ出て敵の飛車を威嚇することに心つかぬ
 が素人の素人たる處であります此の如きことは本職が見れば笑ふに耐へたるお話を
 ありますが之れまで棒銀で惱ませられたり之を得意に指したがる人があるのでお話し

のために斯くは愚にもつかぬ穴だらけの策將棋をお目にかけていたのでありますが我々は此な馬鹿な指し方はせぬと云ふ讀者は他ごとく御覽を願ひます。

筋違角

次は素人の好んで指す先手から二二角と角を替つて四五へ打ち込む指し方でありませぬ之れも先手として損の指し方で棋師は指す事が稀であります之れには定跡がありませんから中飛車や棒銀よりも幾分か指したのを見ますが之れは態と力將棋に指して後手を紛はさんとの野心でありまして矢張り正しき將棋ではありません、併し定跡もありませんことゆる之れは後にお目に懸けることにして先づ素人の指す筋違角の手順を申し述べます。

扱先手(四七六歩)後手(三三四歩)は普通ですが次に先手(二二角)なる(同銀(四五角)打と指す之れで先手は歩を一つ掠める順となりますから徳の様であります但其代り角を打つて仕舞ひ容易に成れませんから實際は徳と申されません然るに後手は二二銀と上つ

て居て且つ角を手に持つて居て機を見て何處へでも打ち込むことが出来ますから先手は之を恐れて駒を盛り上げて位を取ることが出来ません、然るに其受け方の心得が無いと歩を一つ掠められた爲めに大に指し悪き考へを抱き慌て、先手の手段に乗せられるのであります元來之れはケレン即ち山子の手段でありますから本筋に受ければ少しも恐ろしい事は無いのであります、因て先づ其ケレンに引つかゝる馬鹿々々しき指し方を出し次に本筋の受け方を出して参考に供します。

扱先手の四五角に對し後手は六三八角を成られるを防ぐため(五二金右と上ります先手は目的通り(三三四角)で一步を掠めます後手(三二金と上る先手(二六歩)三三銀(五六角)八四歩(八八銀)八五歩(七七銀)と云ふ手順で後手方はいろ／＼指し手があるが先手方は却つて之れと云ふ手もないので玉將の圍ひにかゝりたいのであります之れでは尋常の將棋となり且つ後手方には角を手に持ち居り先手は角を打つて仕舞つて勢ひ手詰りとなりますから兎も角(二五歩)と突く後手は角を攻めるため(五四歩)と

突^つく先^{せん}手^て 六六歩と突^つき角^のの逃^{にげ}路^{みち}を明^あける 六二銀 一五歩と突^つく此^{この}時^{とき}後^ご手^ては五三銀
 とでも進^{すす}むか四一玉と玉の圍^{かこ}ひに移^{うつ}つて居^をれば好^よいのです^が端^{はし}歩^ぶを負^まけまいと 一四
 歩と受^うけたがるので先^{せん}手^てのケレンに對^{たい}し一^て手^てのお手^て傳^{つた}ひを致^{いた}します先^{せん}手^て 二四歩と突^つ
 く同^{どう}銀^{ぎん}と取^とれば好^よいが形^{かたち}が惡^{わる}ひから 同^{どう}歩^ぶと取^とる、先^{せん}手^ては 一五歩と突^つきくれる後^ご手^て
 之^{これ}を敵^{てき}のケレンと知^しらずに 同^{どう}歩^ぶと取^とる先^{せん}手^て目^め的^{てき}通^{とほ}り 一^て二^て歩^ぶと打^うつ之^{これ}で後^ご手^ては同^{どう}
 香^かと取^とれば同^{どう}角^{かく}なると指^さされるから角^{かく}成^なりを防^ふぐため一^て二^て歩^ぶに對^{たい}し三^て四^て歩^ぶと打^うてば一
 歩^{いっ}歩^ぱなると指^さされ香^か車^{くるま}を取^とられた上^{うへ}にと金^{かね}を作^{つく}られ結^{けつ}局^{きよく}後^ご手^ての負^まけでありませう。
 又^{また}始^{はじ}め先^{せん}手^ての、一^て五^て歩^ぶを後^ご手^て同^{どう}歩^ぶと取^とらず角^{かく}路^ろを止^とめるため 三^て四^て歩^ぶと打^うつて見^みます先^{せん}
 手^て 一^て四^て歩^ぶと取^とり込^こむ 四^て一^て玉^{たま}と寄^よる 三^て六^て歩^ぶ 五^て三^て銀^{ぎん} 三^て五^て歩^ぶ 同^{どう}歩^ぶ 一^て三^て歩^ぶなる
 で矢^や張^はり先^{せん}手^てのケレンに乗^のつたのであります、之^{これ}は後^ご手^てが負^まけるやうに／＼と態^{わざ}々^々
 先^{せん}手^てのケレンに乗^のつた馬^ば鹿^か々々しき指^さし方^{かた}でありますから筋^{すぢ}違^か角^{かく}の利^きき目^めがあつたの
 であります^が扱^さ後^ご手^てが此^こんな馬^ば鹿^か々々しき指^さし方^{かた}をするからケレンに乗^のるのでありませう。

角 駒持手後

九	八	七	六	五	四	三	二	一
皇	将	海	香	王	香		将	皇
	進						海	
香	香	香	香	香	香		香	香
						香		
				角				
		歩						
歩	歩		歩	歩	歩	歩	歩	歩
							飛	
香	桂	銀	金	玉	金	銀	桂	香

(圖は 四四五角打の處)

しな 駒持手先

(土居曰) 筋違角は、はめ手に頼^たつた戦^{せん}法^{ぽう}で、雙^{すわう}方^{ぽう}共^きに頗^おる危^{あや}険^{けん}な將^{しょう}棋^ぎである、見^み事^{こと}に成^な功^{こう}すれば敵^{てき}を全^{ぜん}滅^{めつ}にすることを得^えるも、敵^{てき}の策^{さく}戦^{せん}よるしき時^{とき}は反^{はん}對^{たい}に壓^{あつ}迫^{ぱく}を加^くへられ、手^て段^{だん}の施^せしやうなくなる、要^よは善^{ぜん}惡^{あく}共^きに四^し五^ご角^{かく}打^{うち}が原因^{げんいん}である。

すが若^もしも後^ご手^てが本^{ほん}筋^{すぢ}の止^とめ方^{かた}を知^しつて居^かたならば先^{せん}手^ての筋^{すぢ}違^か角^{かく}は大^{おほ}いに不^ふ利^りであると云^いふことが分^{わか}つてまゐりますから之^{これ}より後^ご手^て本^{ほん}筋^{すぢ}の受^うけ方^{かた}を掲^かげます。

四七六歩 三四歩 二二角なる 同

銀 四 五 角 打

之^これまでは前^{ぜん}記^きと同^{おな}じく筋^{すぢ}違^か角^{かく}の打^{うち}込^こみであります^が此^{この}時^{とき}後^ご手^て方^{かた}も六^{ろく}三^{さん}の角^{かく}なるを防^ふぎ傍^{かた}々^々敵^{てき}が一^{いっ}歩^ぱを掠^{かす}めるならば我^{われ}も一^{いっ}歩^ぱを掠^{かす}める含^{ふく}みで 八^{はち}五^ご角^{かく}と打^うつ此^こ處^こで先^{せん}手^てが八^{はち}六^{ろく}歩^ぶと角^{かく}の頭^{かしら}を

攻めれば七六角で一手先きに一步を掠めますから先手も三四歩と一步を取り返へすか六三角なると指したいが然る時は後手も六七と八七へ角の成りがあり結局先手が歩損でありますから先づ後手の角成りを防ぐため先手は角を其まゝ四五へ置き放にして七八金と上る後手三二金先手八八銀で同じ形となりますが後手は一步を取つた上に反對に先手を取りましたから先手の筋違角は終ひに不利に陥つたのであります。以上は簡單なる筋違角の受け方でありすが此に大橋家の秘傳記に出て居る定跡を出していよゝ筋違角の不利を示して置きます。

○七六歩 ○三四歩 ○二二角なる ○同銀 ○四五角打(變化春) ○六二飛 ○三四角 ○三二金 ○五六角 ○七二銀 ○二六歩 ○六四歩 ○六六歩 ○五二金 ○二五歩 ○三三銀 ○八八銀 ○五四歩 ○七七銀 ○五五歩 ○六七角 ○六三銀 ○七八金 ○五四銀 ○四八銀 ○四四歩 ○六八玉 ○六五歩 ○同歩 ○同銀 ○六六歩 ○同銀 ○同銀 ○同飛 ○七七銀打 ○六二飛之れにて先手の筋違角は當分捌き手なく後手は角を手にして且つ位勝ちでありますか

ら先手は不利の局面になりました。

變化 (春) 始め ○七六歩 ○三四歩 ○二二角なる ○同銀 ○四五角打

までは何れも同じとして前章では後手六二飛と指しましたが今度は六二飛を止め後手

○八五角 ○三四角 ○七六角 ○七八金 ○三二金 ○八八銀 ○五四角 ○五六角

にて後手は却つて先手となります、右の通りにて筋違角は損と云ふ事に定りましたのであります。

實戦の實例

何の仕事でも上手、名人ほど苦心があります名人や上手ならば格別苦心せずともスラ／＼と出来さうなものであります其實は名人上手となると人にも感心されるやうに作り又益々腕を磨き上げやうと云ふので一層苦心するのであります、之れに反し下手は其心配がなく何でも早くスラ／＼と仕上げます其代り出来上つた處で平凡と云ふよ

りも見苦くて一文の價値もありません、將棋も其通りで大家となるほど苦心して人に見られても恥かしくなく又之れに依つて手腕を磨くことに熱心します、下手將棋は心配もなく考へもせずにスラ／＼と早く勝負をつけますが其代り始めから仕舞ひまで穴だらけの笈將棋で人に見られると笑ひ草となり自分も一向手腕が上達しません、これにつき大家のさしぶりにつき一局を出して其苦心の跡をお話しいたします。

明治四十二年に將棋同盟社が出来たころでありましたが其頃六段であつた宿將川井房卿氏と金易次郎氏の始めての對局がありました此時金氏は出京して間もないころで二十歳を越したばかりで二段でありましたから川井氏に角を引かれたのでありませんが今は八段の大家となつた位の金氏でありましたから地方から出た計りの二段でも其態度と云ひ指しぶりと云ひ全く理想通りでありましたが將棋を強くならうと云ふには始めから此態度がなくては何時までも上達することが困難であります此一局は二十四時間かゝつて金氏の勝ちになりましたが角を引かれたとは云ふものの若武者としては

二十四時間辛抱したのが感心した指しぶりであり、讀者諸君も早く指すばかりを樂みとせず此態度を以て指していたゞきたいものであります。

角落 當時六段 川 井 房 卿
勝 當時二段 金 易 次 郎

▲四八銀 ▲三四歩 ▲五六歩 ▲五四歩 ▲四六歩 ▲四四歩 ▲二六歩 ▲三二銀 ▲一六歩 ▲一四歩 ▲三八金 ▲四三銀 ▲六八銀 ▲三二飛 ▲三六歩 ▲六二玉 ▲五七銀 ▲七二玉 ▲六八金 ▲五二金 ▲左六六歩 ▲六四歩 ▲五八玉 ▲八二玉 ▲二五歩 ▲三三角 ▲二七金 ▲七二銀 ▲七六歩 ▲七四歩 ▲四七銀 ▲六三金 ▲六七玉 ▲八四歩 ▲八六歩 ▲九四歩 ▲九六歩 ▲八三銀 ▲二六金 ▲五一角 ▲三八飛 ▲六二角
之れまでは双方が定跡に従ひ駒を組み上げたのでありますが之を上手左玉、下手銀冠りの駒組と申します此時上手は先手で仕懸ける順でありますから。
▲三五歩 ▲四五歩 ▲同歩 ▲三五歩 ▲三六歩 ▲四三銀

と指しましたが後に關根氏(當時八段)の評に上手の三六歩に對し下手の四三銀は無理である矢張り三六歩を▲同步と取り込むのがよろしく其時上手▲同金▲三五歩▲四六金と寄る時に▲三四銀と上るのが順當であると申しました次に上手

▲三五歩▲同銀▲同金▲同飛▲同飛▲同角▲三一飛▲五七角なる▲同玉▲七二金▲三九飛なる▲三八歩(此歩は手筋なりと關根氏評す)▲同銀▲五五歩▲六七玉▲五六歩▲五八歩▲五四金上る▲七八玉▲六五歩▲七七銀打▲六六歩▲同銀▲六五銀打▲六七歩▲六六銀▲同步▲六五歩▲七七銀▲六六歩▲同銀▲六七歩▲同金▲六五歩▲七七銀▲六六銀▲六八歩▲六七銀▲同步▲三三桂▲六八銀打▲四六歩▲四九銀▲三六金打▲八五歩▲四五桂▲三七歩▲三五金▲三三角打▲六四金よる(此手にて五五金打と指したしと關根氏評す)▲四三角なる▲三四歩▲四四る▲五五金打▲八四歩▲同銀▲一一る▲七三桂▲八八香▲八五歩▲四三歩▲二五金▲四二歩なる▲五七歩なる▲同步▲五六歩▲同步▲同金▲五八歩▲七五歩▲四四る▲七六歩▲同銀▲七

七歩▲同桂▲七五歩▲八七銀▲七四飛▲五二と▲五四金▲四三る▲六六歩▲同步▲七六歩▲同銀▲六六金▲七五歩▲同銀▲同銀▲同飛▲七六歩▲六七歩(飛車を見棄て六七歩は強き手なりと關根氏評す)▲同銀▲同金▲同玉▲六六歩▲六八玉▲五五飛▲七八銀▲五七銀▲七九玉▲五八銀なる▲五六歩▲同飛▲八五桂▲八四歩▲八三歩▲同金▲六二と▲八五桂▲六一る

上手方は苦心慘憺して我陣營を防禦しつゝ少しの餘裕を見てはと金を寄せつゝ終ひに敵玉に肉薄したるは其攻守の味ひ津々として盡きざるものであります將棋は此邊に興味があります如何せん上手は角落ちと云ふ大駒落ちの傷みがありますので最早や見切り時なりと考へ六一ると突き込んで急撃を試みたのであります此時下手方は敵を詰めざれば我方危しと見て凡そ二時間斗り詰手を考へましたが激戦中の事でありまして無暗に王手々々をやつて萬一詰めそこなつては一大事でありますから更らに退ひて自分の方に詰みのあるや否やを一時間も考へましたが後にイザと云ふ時に八二金引く手

で一手隙きのあることを考へ得ましたので、四九成銀と指して敵の惣王を取りました。上手方は此隙きに、七二と寄せ、九二玉と逃げた處で、七二と指し、八二桂間、七二と(春印)一手隙きを指したから下手は、五九飛なるで先手を取り、六九歩間、七二と又一手を隙きで必死を懸けましたから上手は九一とで香車を取り、明き王手を懸けましたが下手は前に考へて置いた通り、八二金引くと指しましたので上手は之を王手で詰めるの手段なく然りとて自分の方は最早や防禦の術も盡きましたので終ひに駒を投げて金氏の勝になりましたが此將棋の終局に近く上手(春印)の同とと八二の桂を取る處で此桂を取らず、七三金打と指して必死を懸けたならば下手は防ぎの手なかりしならんとの説がありました。川井氏の説に、私も之れは考へぬではありません。若し此金を手離して仕舞つては却つて自分に詰みのあることを發見しましたので、金氏が若し之れに心づけば忽ち自分が負けとなり若し又金氏が心づかず自分が勝つたとし、てもそれは僥倖の勝ちで人に見られて恥づべきことでありますから之を止めたのであ

りますと語られました。當時金氏は二段ゆる此詰みを發見し得られたか否かは不明であるも此時川井氏が單に勝を貪る卑劣の考へであつたならば下手の若武者と云ふを侮つて僥倖を考へて七三金と打つたかも知れませんが流石に高段の川井氏とて縦令敵が心づかずとも僥倖の勝は恥づべきことを考へて金を手から離さず指したのは將棋を指すなら斯ありたきものと皆々譽めたのであります。尙ほ参考のため川井氏が七三金と打つて金を手離しては詰みのある指し手を掲げますと上手の七三金に對し下手

●五九飛なる、六九歩、六八銀、八九玉、七九飛、九八玉、九九飛なる、同玉、九七香打、九八飛、同香、同玉、九七飛、九八玉、七七桂、同銀、六九紘にて詰み

然るに川井氏の手に金があつて九八飛間を九八金と間をすると同香、同玉、九七金、九九玉、六九紘、八九香間で詰みがありませんから即ち金を手離ぬのであります。尤も斯く金氏が四九成銀で飛車を取り一手隙を指さずとも直ちに王手々々の詰みがあつた事は後に土居八段(當時四段)が發見しましたが金氏は敵の左の方で王手々々の詰

みなきを考へたため四九成銀と指しましたので右の方に詰みある事までは尙ほ考へ切らず指したのでありまして實戦の際ゆるぎ考へ盡せず後に土居氏は此處のみに苦心して其詰みを考へ出したので強ち金氏の考への足らなかつたのを尤めることは出来ませんが能く考へさへすれば斯る詰み手もありますゆるぎ初學者は決して輕卒に詰みなしと考へずに指しては成りません、即ち右方の詰みと云ふのは左の如くであります(即ち四九成銀の手で)

- 六八成銀●同玉●六七銀●七九玉●七八銀●同玉●六七歩なる●八九玉●七八と
- 同玉●七六飛●六九玉●五七桂行●五八玉●七八飛なる●六八歩●六七銀打●四八玉●六八歩●五八歩●四九桂なる●同銀●四七飛●三八玉●四九飛なる●同玉●五八行也

駒の運用法

自分より強ひ人と指す時は勿論ですが對等の人と指す時でも無暗矢鱈に駒を取り替へることは損があります例合ば角と角が睨み合つた場合などに初心者は直ぐに取替へるものゝやうに考へますが此角を取り替へた後に自分の方では敵地に好き打ち込み場所があると敵に角を渡しても我陣地に打ち込まれる隙がないとか云ふ場合は取り替へる必要もありませんが之れに反し敵地には隙がなく我陣地に隙がある場合などは容易に交換してはなりません此場合には態と角道を留めるとか方向を轉じて敵角の睨みを外すと云ふやうに指すので又銀や桂馬が交換の地位に立つた時も之を外して反對の方面へ動かして敵の銀や桂を遊び駒にさせる手などが澤山ありますから駒の交換を迫つて來ても充分考へて後にやりませんと敵の術中に陥つて我が不利を招くことが度々顯はれてまゐりますのであります。

又敵の手に優勢の駒を持つて居られましたならば何れの機會に敵が此駒を活用するかを始終注意して居なくてはなりません、即ち何の方面で戦ふにも敵に優勢の伏兵があ

ることを忘れてはなりません。
 又自分の方へ優力の駒が手に入らなければ之は輕卒に打つて仕舞つてはなりません、
 之れが手にあれば何れの處へでも援兵に赴き又攻め込む利器ともなりますので敵は極
 めて指し悪く充分仕懸けて來ることが出來ませぬのであります況して駒を落した將棋
 には上は手の方は一見した處で何にも手薄すのやうで乗すべき隙きがあるやうに思は
 れるので無暗に挑戦して駒を費やすやうな指し方をやると忽ち敵の術中に陥るやうな
 ことがあります。

又敵の飛車や角を封じてある將棋、即ち敵の飛、角の動く道が留つて居て歩や銀が邪
 魔をして居る場合は我から其歩や、銀へ逆つてはなりません、其處へは成るべく遠ざ
 かつて、ソツとして置き敵の飛、角を一手や二手では捌けぬやうにして置くことであ
 ります、如何なる武藝の名人でも家の中では薙刀や槍は充分に使へぬものであります
 から此武器は成るべく世に出させぬやうにして置くことを考へなくてはなりません。

待ち駒の可否

素人の將棋に待ち駒を卑怯として大に排斥しますが之れも時に因つては必要の手とし
 て黒人は之を排斥いたしません、尤も將棋は武士道とも云ひ君子の娛樂とも申されま
 すから、只勝ちさへすれば好いと云つて餘り卑劣陋態の手を指すことは不可であります
 すが、待ち駒は早く勝ちを定むる場合や一手々々で勝敗を争ふ時などには大に妙手と
 される場合があります。之を待ち駒と云ふと卑劣のやうに聞えますが黒人は之を縛り
 手で云つて度々利用するのであります、而して之が待ち駒と云つて排斥される場合と
 妙手と云つて譽められる場合は時機と局面とを考へなくてはなりません、譬へば我に
 は充分の餘裕があり又澤山の駒を持つて居て敵から仕懸けられても二手や三手では詰
 められる恐れのないのに無暗に待ち駒を打のは將棋の變化の趣味を減じて面白くあり
 ません、又王手々々で詰みのあるのに手を隙して待ち駒を打つなども面白くありませ
 ん、此待ち駒、即ち縛り手の必要の場合は双方の戦局が大に迫つてまゐりまして王手

王手で追つて居ては終ひに入玉される恐れあるとか又は駒に不足を生ずると見た場合に先づ後から攻めて次に前から縛り駒を打つて必死を懸け敵をして手拔きのされぬやうにする場合には決して不可ではありません、例令ば我も亦危機一髪と云ふ時に待ち駒で勝を制するのは所謂正當防禦であり不可と云はれぬのみならず此一手で咄嗟に勝を制するやうな滋味津津たるものがありまして古來此手に妙手と云はれたのが澤山あります、故に場合によつての待ち駒は決して卑劣として排斥すべきものではなく又之を利用して差支のないものであります、(尙ほ後に出す關根氏の縛り駒の處を見よ)。

玉將の備へ

玉將は決して匹夫の勇を揮つて矢鱈に挺身するとか又は單身残つて居てはなりません、故に駒組の始めに右とか左とかへ圍つてのちに戰を始めなくてはなりません、而して一方の金、銀を以て之を圍ひ一方の金、銀、桂、香が飛、角を助けて活動するのが本則であります、居玉のまゝで金、銀が悉く戦線に出て玉將が孤立して居たの

では今川義元が桶狭間で脆く打ち死にしたやうな恐れがあります、然りとて又矢鱈に玉の周圍にのみ金、銀を集めて圍つて居るのも不可であります、武田信玄は居城を築かずには堀、人は石垣、人は楯と申しまして八花形の館に居りましたが其領分に足を入れた敵將はありませんでした然るに其子勝頼の時代に甲府城を築きましたが却つて亡びて仕舞ひました、將棋も之れと同じく必要の駒を要所々々に配置してあれば無暗に玉を圍はずとも陣地は堅牢なる廣い城であると同じであります、玉は圍ふべく、玉は挺身すべからざるのが原則であります、之も程度でありますから能く考へなくてはなりません。

飛角の働

飛車と角は先鋒の大將でありますから其道を留めるやうな駒の配置を避けなくてはなりません、且つ又之を深く我陣地に封じ込めて置てはなりません、飛、角論と云ふものがあります故人渡瀬莊治郎(天野宗歩の高弟、六段なれど今日にては八段以上なら

ん)の作と申しますから大に要領を得て居りますので左に意譯して出します。

飛、角は先づ對等の駒なるが其利き方に於ては角は飛車に及はざる處がある、飛車は何れの處に居ても十七目の利きがあるが角の方は中央五五の處に居ただけが十七目の利きがあるのである、成つて後は角の成りたるは素飛車(成らざる飛車)の上にあるも碁王の下にあり(成つた飛車)之に因て敵の角を攻めるには盤上五五の歩を突き留めるのが必要である、五五は盤の中央であつて大切の場所である、兵書に山下に戦ふ時は其山を取ると云ふ事がある、五五を乗取る時は敵を攻むるに早く我進軍の道自由である、故に五五の歩を突き捨てる場合が一局中の勝負の訣である、但し角を替つて後は五五の歩を突き留むるも効なし。

飛車先の歩は早く突き替はるを利とするのである例令ば先手ならば二四歩、同歩、同飛と替はり後手は八六歩、同歩、同飛と替つて飛車先の歩を交換して一步を手にて持てば古來五つの利ありと稱されて居る。

右の二個條は盤上の第一義である、併しながら飛車先の歩を換るよりも五五の歩を突き留むるのが主である、既に角を換つて後は飛車先の歩を換るのが大に勝つて居るのである云々。

失敗は成効の基

此金言は色々の事に利用されて居ますが將棋も其通りであります、勝負は時の運と云つて勝つたからとて必ずしも喜んではなりません又負けたからとて耻とするに足らぬことがあります、始めから勝負のみを眼中に置いて指すやうでは上達することを得ません、負けるよりは勝つのを望むのは誰も同じ人情でありますが連敗の時が更に進歩しつゝあると云ふことを忘れてはなりません、「負けて上り目だ」と云ふと負け惜みだと笑ふ人がありますが、實際に其云ふ理屈もあるのであります、併し負けてのみ居て、それで自然に強くなるのだと考へると大なる誤りであります、負けて強くなると云ふのは自分の負けた原因を再三研究して解らぬ處は先輩に問ひ一個所づゝでも悟つて行

く時は後には自然と發見する處があつて上達の速かなることは請合ひであります、負けは一日の耻で永遠の耻ではなく臆て成効の基ひであります、之れに反し勝つたから自分が強いと安心して居るやうでは一生上達の目的がありません。

以上の數話は關根名人が先年記者に物語り之れを將棋新報に掲げたものであるが大に參考となるべきものなるを以て其大意を抄出して此に出したものであります。

玉將早逃げの實例

大家の將棋を指しますのを見ますと愈々決戦に近きますと必ず見切るまで考へて定算なくしては駒を動かしません、例へば先づ自分の玉將が此に居ても詰むか詰まぬかを見極めました若し此まゝ敵に攻められても直ちに王手々々で詰まぬと見極めがつきますと次に敵へ向つて仕懸けて直ちに王手々々で詰みがあると見込みがつきますと直ちに仕懸けますが若し敵も詰まぬと見ますと已むを得ず一手隙き即ち必死を懸けます、而して此必死を懸けるにも充分敵味方の形勢を考へませんと必死を懸けて居る中に敵

が防ぎながら打つた駒が却つて自分の方へ必死に當り先手を取られる事があります、此やうに復雜して來た場合は急いで勝うとするよりも負けぬやうに工夫して置いて二手や三手では此方は大丈夫と云ふ備へをして置くのが肝要であります、然りとて持つた駒を防禦のため打つて仕舞つては今度は敵へ仕懸けることが出来ませんから此場合に我玉將を安全地帯に遁げ越すのが利益であります初心者の中には自分の玉が戦線に近きにも拘はらず、又敵玉が詰むか詰ぬかの見極めのつかぬに拘はらず取り敢へず仕懸けて見ますやうですが、それで敵が詰まぬ時は自分の方が指し切つて敵から仕懸けられても防ぎの手段がつかぬことがあります、故に弱いやうでも玉將を安全地帯に移して後に戦ひにかゝるのであります之を「王の逃げ越し八手の徳あり」と申すのであります、先年關根名人と故蓑太七郎氏が手合せの際に愈々激戦となつて圖の如き局面となりました(關根氏が左の香を落して指したのであります)此局面では蓑氏の方は最早指し切りで關根氏の方が勝ちの形勢ではありましたが關根氏は自分の玉將が戦線

に近づいて居りましたので若し敵から仕懸けられると (▲) 印 養氏 (▲) 印 關根氏

● 四七金打 (▲) 同飛 (▲) 同金 (▲) 同玉

關根氏 (持駒銀、桂) 養氏 (持駒金、歩)

九	八	七	六	五	四	三	二	一
角					歩	王	桂	皇
飛					歩	王		
			歩			歩		
香		歩	歩					
飛				歩				
		歩						
歩	歩					玉	歩	
					飛		桂	香

と指しました時に敵へ飛車を渡しますから縦令負けの手が無いまでも敵が先手に飛車を打つて王手を懸けられると如何なる變化を來すかも知れませんかから勝を急かすに大人しく二八玉(い)と早や逃げを致しました之れが爲めに養氏は手懸りを失つて據るなく四六歩(ろ)と打つて手懸りをつけました此時關根氏は最早や玉が戦線に遠つて居て飛車を取られても二手や三手で詰まぬと見極めがつきましたから

▲三四歩 ●四七歩なる (▲) 三三歩なる (▲) 同玉 (▲) 二五銀と縛り駒を打ちました (待ち駒の條を見よ) ●四八ち (▲) 二一と尚ほ急かすに必死を懸ける養氏已むを得ず ●三八と指して敵玉を引き出さうとする關根氏此と金を同玉と取らずに (▲) 一七玉と逃ける

之れで養氏負けましたと云つて駒を投げましたが此一七玉は一寸指しさうな手でありますが始めの二八玉の早や遁げは流石は妙手と云はれたのであります。

入り王の話

双方が詰め兼ねて互ひに入り王となつた時は大抵引き分に致すのが武士道であります。が素人の将棋には動もすると何時までも指して居て家内を困らせる先生がありますから其引き分け即ち持將棋とすべき程度につき關根名人が曾て記者に語られた實例を記します往年宗桂師が或る人と指した時に宗桂師にはと金が澤山出來て小駒も手にありますから利方のやうでありましたが之を指して居た宗桂師は此將棋は負けだと云つて

駒を投げましたので弟子どもが不審して之は先生が此末を指すのが面倒と思つて投げたのであらうと疑ひ内々で宗桂師に問ひましたらば師の答へに此將棋は敵方に大駒が四枚とも渡つて居るので我方には小駒が澤山あつても氣永く指して居ると俗に云ふヤスリと云ふ手で我駒は段々と取られて仕舞つて結局は負けとなるのである、其ヤスリと云ふ手は敵が大駒で我駒を遠くから取り巻き夫より歩を成つてと金を作り其と金を段々引きつけて一つ替り二つ替り大駒を次第に引きつけてチリ／＼と肉薄して來られると我方の地盤は段々狭くなつて終ひにはと金を作る餘地が無くなり之に引きかへ敵は何ほどでもと金を作る餘地があり結局時間の問題で大駒の無い方は負けとなるのであると語られました其處で關根氏の考へでは双方とも大小の駒が平均して居て入玉になつたらば之れは早く持將棋即ち引分とするのが本意だらうと考へるが萬一甲方にのみ大駒が四枚あつて乙方は大駒が一つもないと云ふ時には乙方に小駒が澤山あつてと金も充分出來て居ても之れは乙方の負けとしたいものである、尤も乙方に小駒が三倍

もあつたならば強ち負けにするにも及びませんが小駒のみ二十二三で大駒が一枚もなく單に小駒が五つか六つ多き位の處では如何に入玉してと金で圍つて居ても結局勝利の目的はありませんから之は負けとするのが潔きよい事と思ひます、且つ又入玉となると容易に勝負のつかぬものゝやうに考へますが戦端の開き始めとか混戦状態の時とか愈々詰みの有り無しと云ふ大事の場合には一手に一時間も二時間もかゝるので甚だ時間を費やしますが互ひに入玉となつては馬の後足で蹴り合ふやうなもので格別に名案も無く只々同じ手を繰り返へして行く計りでありますから存外早く片のつくものであります因て互ひに入玉しても駒の比較を見て大駒の無い方が投げるのがよろしいと思ひます素人方の徒づらに時間を費やすを無益と思ひまして大畧の引分標準を申し述べて置きます。

又一説に大阪の小林東伯師の説と云ふには敵方に入玉された時に勝負を決せんとならば我玉は敵地の三段以上(即ち敵陣)に入らざることを要す我玉も亦敵地に入り安全

	方甲前手				方乙ふ向				
	九	八	七	六	五	四	三	二	一
	玉	と	と	と	?	?	?	?	王
	と	と	と	と	?	?	?	?	
	と	と	と	と	?	?	?	?	
	?	?	?	?	?	?	?	?	
									王
	王								

乙方の大駒が三方から見通して居るので玉の三方のと金が動けぬからである(動けば明き王手となるから)之れ等を参考として持將棋の標準を定めることにされたいのであります。

を計つて後に敵を攻めやうと云ふのは卑劣である故に縦令大駒が澤山あつても我玉も敵地即ち三段以上に入つたならば引分け即ち持將棋とするが武士道である、即ち圖の如き時は大駒の三枚ある方が勝となるであらうが我玉も三段へ入玉して居るから持とするがよろしい但し甲方もと金が八つ以上出来た場合即ち圖の如きものである云々。又此形で結局甲方が負けとなると云ふのは

黒人と素人の指しぶり

凡そ藝事ほど天狗になり易いものはないが特に素人の將棋指しとなると一層天狗になり易い、少し黒人に就て稽古でもして純素人を手玉に取るやうになると最早初段だ二段だと自稱して終ひに免状をもらふ氣になるが實際に黒人に懸つて見ると同じ段級でも大駒を引かれる程の相違がある、然し黒人の方でも斯云ふ人を負かした處で利益がなく負けてやつた方が却つて利益となる點があるので平素對等の扱ひをしたり時々花を持たせて勝ち越させて「お強い〜」とおだて、置くから天狗は益々天狗となる、其黒人が人が悪いやうだが藝人は何事にも素人をおだてたがるもので其おだてらるゝ方が悪いのである、故に黒人と指して三番に一番勝つた位では先づ大駒を引かれる相違があると自覺せなければならぬ記者は平素此事を見たり聞いたりして居るので決して黒人と真劍の手合した事がないが或る時、或る事からして真劍を指して見やうと云

ふ事になつて大膽にも平手で對局したのであるが其實は無論大駒を引かれるのであるから黒人が何云ふ指し方をするかと思ふと矢張り慎重の態度で記者を對等扱ひに指し居るので記者は大に覺る處があつて黒人と素人の指しぶりにつき甚だしき相違のあることを感ずることが出来ましたから參考のため其時のお話を致す。

いよ／＼對局となつて棋師の方では何指しても勝てる筈であるから無暗矢鱈に指して來るかと思ひの外、矢張り定跡通りに正々堂々と駒組をして來る、やがて戰端が開ける場合となつても必ず考へてから歩を突く、いよ／＼激戰となると一の駒を動かすにも丁寧な考へてから手を下す、特に飛、角を動かす場合などは能々前後左右を見合はせて飛車取り王手や角取り王手のかゝらぬやうに注意してから動かす、終ひに寄せ合ひとなつて來るとチャンと一手先きに寄せがあると云ふ事を見極めぬ中は仕懸けて來ぬ而して若し自分の方に十數手先きに詰みがあると見ると必ず防禦の地位に立つて充分安全にしてから始めて此方へ仕懸けて來るのである、然し其實は記者の力では十數手

先きの詰みは讀み切れぬのであるから棄て置ても詰めらるゝことが無いのを承知して居るのであるが萬々一記者が知つて居たらば棋師が負けになるから縱令記者には知れまいと承知して居ても決して油断せぬのである、又其知れまいと云ふ危險を冒して胡麻化して勝たうと云ふ卑劣の指しぶりはせず矢張り同等の黒人と指すのと同じやうに充分本筋をたどつて指して居るから記者の方では確かに勝つたと思つて指して居る中に美事指し切つて最後の負けとなつて仕舞つた、是に於て記者は自分の指した手を考へて見ると一として確信のある手はなく悉く其時限りの手で含みと云ふものが一つもない、之れがために此手は好いと思つて指した手も一々其裏をかゝれて駒損に計りなる、甚だしきは目先きの徳のみ考へて後の事は考へず成るべく敵の駒へ當りをつけて攻勢を取つて居るつもりであつた、又飛車角を動かすにも必ず敵の歩を取らなくては損のやうに考へて指して居る、之れがために却つて敵に歩を打ち込まれてと金を造らせるに都合のよいやうにお手傳ひをして居る。

事を取つて一つの駒を動かすにも充分の注意を拂ふべき筈であるのに記者は少しも考へて云ふものがなくトン／＼と指して行き之に反して何ほどメチャクチャに指しても勝ち得らるゝ實力のある棋師が却つて丁寧に指して居るのは素人の情なさりと黒人の心懸けの違つたのに感嘆せずには居られぬのであつた。

從來此棋師とは記者が大駒を引ひてもらつて指したのであるから棋師の丁寧に指すのは骨の折れる手合だからと思つて居たのであるが今度のやうに手合違ひで目をつむつて居ても勝てる將棋に矢張誤りの無いやうに／＼と丁寧に考へて指すのであつたから益々素人と黒人の差別が感ぜられたのである、併し黒人とても始めから黒人ではない其指し習つて行く心懸け一つで黒人となり得たのであるから此書を見る諸君が將棋を強くならうと思ふならば之れまで色々記したやうに順序を以て正しく研究して行か

りたいものであります。

駒組の秘訣

之れまでに種々將棋に就ての参考となるべき事項を記しましたので讀者諸君も最早や大に了解するゝ處があつた事と考へますので最後に各種駒組の秘訣を掲げます本來ならば一々講義を付したのであります。が紙数の都合で其主要なる部分のみ説明を加へましたが諸君も既に進歩して居るのでありますから之れだけでも御會得の出來ることと思ひます。

一番 平手四間 (後手の受け方) 手前勝手

- 七六歩 ○三四歩 ○二六歩 ○四四歩 ○四八歩 ○三二銀 ○五六歩 ○五四歩 ○五八金右 ○
- 三三角 ○六八玉 ○四二飛 ○七八玉 ○六二玉 ○五七銀 ○七二玉 ○九六歩 ○九四歩 ○二五
- 歩 ○六二銀 ○三六歩 ○四三銀 ○六八銀上 ○六四歩 ○四六歩 ○六三銀 ○六六歩 ○八二玉
- 七七角 ○七二金 ○一六歩 ○一四歩 ○三七桂 ○五二銀左 ○七五歩 ○五一金 ○六七銀 ○

六二金上(先)七六銀(先)五三銀(先)六五歩(先)七四歩(先)六六銀(先)七三金左(先)八六角(先)七五歩(先)同銀右(先)七四歩(先) (此時先手六六銀と引ひては後手となる故) (先)六四歩(先)七五歩(先)六三歩なる(先)同金右にて受け止む形となる又後手の七四歩の時先手が(先)六四銀と指せば(先)同銀右(先)同歩(先)七五銀打(先)同銀(先)同歩(先)六五銀打(先)七四銀打(先)七七桂(先)六四金(先)同銀(先)同銀(先)六五歩(先)七三銀(先)六四銀打(先)六三歩(先)五三銀なる(先)二二飛(先)四三金(先)八四歩(先)三三金(先)同桂(先)二四歩(先)同歩(先)二三歩(先)六二飛(先)五三金打(先)七六銀打也

二番 同斷別手段

(先)七六歩(先)三四歩(先)二六歩(先)四四歩(先)四八銀(先)三二銀(先)五六歩(先)五四歩(先)三六歩(先)三角(先)四六歩(先)六二銀(先)五七銀(先)五三銀(先)五八金右(先)四二飛(先)三七桂(先)七二金(先)六八玉(先)六二玉(先)七八玉(先)六四歩(先)四八飛(先)五二金(先)二五桂(先)二二角(先)四五歩(先)二四歩(先)四四歩(先)二五歩(先)四三歩なる(先)同銀(先)二五歩(先)八八角なる(先)同銀(先)四三歩なる(先)八八角と先きに指しても同じ手也) (先)三七角打(先)四九飛(先)二八角なる(先)六六角打(先)四

四歩(先)二四歩(先)六五歩(先) (此時先手が七五角と上れば二二飛と廻りてよし故に先手) (先)七七角(先)四五桂(先) (此桂の手で後手八五桂と打つか二二飛と廻りたきも共に面白からず此四五桂がよき也) (先)六八銀引(先) (此處にても二二飛と廻れば四五飛と桂を取らるゝ手あり故に後手) (先)三八る(先)四六飛(先)三二銀(先)八六角(先)六三金右(先)七七桂(先)三七桂なる(先)六五桂(先)四五歩(先)五三桂なる(先)同金右(先)三一銀打(先)四三飛(先)四四歩(先)同飛(先)七七角(先)四六歩(先)四四角(先)同金(先)二三歩なる(先)四三銀(先)七七銀右(先)四七歩なる(先)六八金右(先)二八飛(先)八九玉(先)五七銀と指すべし

三番 平手兩居飛車 (向ふ先手)

(先)三四歩(先)七六歩(先)八四歩(先)七八金(先)八五歩(先)七七角(先)六二銀(先)八八銀(先)五四歩(先)五六歩(先)五三銀(先)五八金(先)四二玉(先)二六歩(先)四四銀(先)二五歩(先)三三角(先)六八角(先)二二銀(先)七七銀(先)三二玉(先)四八銀(先)六二金(先)六九五(先)七四歩(先)二四歩(先)同歩(先)同角(先)同角(先)同飛(先)二三歩(先)二八飛(先)四二角(先)五七銀(先)七三桂(先)六六歩(先)八四飛(先)七九五(先)六四歩

四六銀 六五歩 同歩 七五歩 三九角 五五歩 同歩 三三桂 (之れよりは互ひに力の争ひ也)

四番 平手美濃の受 (向ふ先手)

三四歩 七六歩 四四歩 四八銀 三二銀 五六歩 三三角 五七銀 四二飛 五五歩 四四歩 四八飛 五二金 六八金 八二玉 九六歩 七二銀 一六歩 六四歩 三六歩 六三金 三七桂 七四歩 五六銀 (之れは先手の美濃指しに對し後手五歩にて位を取り受けたる形なり)

五番 平手後手美濃 (向ふ先手)

三四歩 七六歩 八四歩 六六歩 六二銀 七八銀 五四歩 五六歩 五二金 右 七七角 四二玉 六八飛 三二玉 四八玉 五三銀 三八玉 一四歩 一六歩 八五歩 五八金 左 七四歩 二八玉 七五歩 同歩 七二飛 三八金 (後手一六歩は突かぬがよし其故は一六歩と突き居れば末に三八金の次に七五飛 六七銀 七六歩)

八八角 八六歩 同歩 一五歩 七八飛 一六歩 一八歩 八七歩 七九角 七二飛 四八銀 六四歩 五七角 八八歩 七六飛 同飛 同銀 八九と 七二飛 七七飛と打たれる也又三八金の時先手六四銀ならば六五歩 七五銀 二二角なる 同銀 四六角 九二飛 七六歩 同銀 六四歩と指すべし

六番 平手本受 (手前先手)

七六歩 三四歩 四八銀 八四歩 六六歩 八五歩 七七角 六二銀 五六歩 七四歩 五七銀 七三銀 七八銀 五二金 右 六七銀 五四歩 五八飛 八四銀 八八飛 四四歩 四八玉 四二玉 三八玉 四三金 六五歩 三二玉 五五歩 同歩 同角 七三銀 七七角 四二銀 五八金 左 三三銀 一六歩 一四歩 四八金 九四歩 五六銀 右 一三角 五七歩 三九角 二八玉 五四歩 三八金 四六歩 七五歩 四八飛 七六歩 同銀 七二飛 六七銀 左 七六歩 八八角 八六歩 同歩 同角 六四歩 同歩 六六角 七五銀 八七歩 六六銀 同銀 九五角

四五歩同歩同飛六八角なる同八五飛八二歩同七三歩同桂同七五飛九三角
同七六飛六五歩同七七銀ひく五七歩同七四歩同八五桂同七三歩なる同四二飛同四
五歩同七七桂なる同同桂六六歩同九六飛同四八歩同三九金よる同四九銀同四七銀ひ
く同三八銀同銀同五三金よる同六六飛同同角同六五桂同六九飛同五七桂同四九歩な
る同五三桂なる同三九と同四二金同同銀同七四角同三八と同同玉同四六桂同四八玉
同四七歩同同玉同三八銀同四六玉同三五金同五六玉同五五金打也

七番 平手四間 (向ふ先手)

同三四歩同七六歩同八四歩同六六歩同六二銀同七八銀同五四歩同五六歩同七四歩同七
七角同六四歩同六八飛同七三桂同四八玉同五二金右同三八玉同五三銀同四八銀同四二
玉同二六歩(甲)同三二玉同二八玉同九四歩同三八金同六二飛同六七銀同八五歩同八八
角同六五歩同七八金同六六歩同同角同同角同銀

(甲)同二六歩の時同一四歩と受れば同二八玉同三二玉同三八金同四二銀上同五九金同

六二飛同六七銀同八五桂同八八角同六五歩同同歩同八八角なる同同飛同四四角同六六
角同同角同銀同六七角同七三角同七六角なる同五七銀と指す之を卯智流と云ふ

八番 平手向ひ四間 (向先手)

同三四歩同七六歩同八四歩同六六歩同六二銀同七八銀同六四歩同七七角同六三銀同六
七銀同五四銀同五六銀同五二金右同六八飛同八五歩同七八金同七四歩同四八玉同七三
桂同八三玉同四二玉同一六歩同一四歩同九六歩同九四歩同四八銀同三二玉同二八玉同
四二銀同三八金同六二飛同六七金(乙)此六七金と指す處で後手同三六歩と指し同五五
銀同同銀同同角同四六銀打同三三角(丙)同五六歩と指す手もあり又先手同三三角
(丙)の處で同二二角と引く時は同六五歩と突くなり

九番 向四間飛車受 (向ふ先手)

同三四歩同七六歩同八四歩同六六歩同六四歩同六八飛同六二銀同五八金左同六三銀同
四八玉同五二金右同七七角同四二玉同三八玉同三二玉同二八玉同五四銀同三八銀同七

四歩▲四六歩▲一四歩▲一六歩▲九四歩▲九六歩▲七三桂▲四七銀▲六二飛▲三八金の駒組もあり

十番 互四間飛車 先手右四間飛 後手左四間飛

▲三四歩▲七六歩▲八四歩▲六六歩▲六四歩▲七八銀▲六二銀▲六八飛▲六三銀▲七
七角▲五四銀▲六七銀▲七四歩▲四八玉▲五二金右▲三八玉▲四二玉▲四八銀(丁)▲
一四歩▲一六歩▲九四歩▲九六歩▲七三桂▲五六歩▲六二飛▲五七銀▲六五歩▲五八
金左▲八五桂▲八八角▲六六歩▲同銀左▲六五歩▲五五銀▲同銀▲同歩

右の中後手▲四八銀(丁)の時左の指手あり

▲四八銀▲三二玉▲五六歩▲一四歩▲一六歩▲九四歩▲二八玉▲七三桂▲三八金▲六
二飛▲五八金▲八五桂▲八八角▲六五歩▲五七金▲六六歩▲同銀▲六五歩▲五五銀▲
同銀▲同歩▲六六銀▲五六金▲五四歩▲六七歩▲五五銀▲四五金▲六六歩▲同歩▲同
銀▲六三歩▲同飛▲五四金▲六五飛(戊)▲五五金と引く手あり角で取れば六六銀と打

つ也但し此處五五金と打たず六七歩と打ち度も面白からず▲六五飛(戊)の時に▲六六
角▲同飛▲同飛▲同角▲五三歩▲四二金よる▲六四飛▲四八角なる▲同金▲五九飛▲
三九銀▲四五角▲三六角▲同角▲同歩▲七三角▲四六角▲六四角▲同金▲六九飛なる
▲三八金と指すべし

十一番 平手向四間表受後手五一やつし組

▲三四歩▲七六歩▲八四歩▲六六歩▲六四歩▲六八飛▲六二銀▲七八銀▲五二金右▲
七七角▲六三銀▲四八玉▲五四銀▲三八玉▲七四歩▲四八銀▲七三桂▲五六歩▲四二
玉▲二八玉▲九四歩▲九六歩▲六二飛▲三八金▲八五桂▲八八角▲六五歩▲六七銀▲
六六歩▲同銀(巳)▲六六七歩▲同飛▲六五銀▲五五銀▲同角▲同歩▲六六銀打▲六八飛
にて後手よろし

右の中後手▲同銀(巳)の時左の指し方あり

▲同銀(巳)▲六五銀▲五五銀▲五四歩▲六四銀▲六六歩▲七三銀ならず▲六三飛▲八

四銀なる(先)七六銀(先)七四金(先)六五飛(先)六六飛(先)同飛(先)同角(先)同角(先)六四歩(先)六二歩(先)七二飛(先)三三玉(先)六三歩なる(先)同歩(先)六四歩(先)同歩(先)同金(先)四九角(先)三九金(先)ひく(先)六八歩

十一番 平手先手右四間懸り受 (向ふ先手)

(先)三四歩(先)七六歩(先)八四歩(先)六六歩(先)六四歩(先)六八飛(先)六二銀(先)七八銀(先)六三銀(先)七角(先)五四銀(先)五六歩(此(先)六五歩ならば(先)六七銀上る(先)べし(先)七四歩(先)四八玉(先)五二金(先)三八玉(先)四二玉(先)四八銀(先)七三桂(先)二八玉(先)九四歩(先)九六歩(先)一四歩(先)一六歩(先)三二玉(先)三八金(先)四二金上(先)六七銀(先)六二飛(先)四六歩(先)八五桂(先)八八角(先)六五歩(先)七九金(先)六六歩(先)同銀(先)庚

變化(先)六六同銀(先)庚(先)の時(先)六五歩(先)五五銀(先)同銀(先)同歩にて(先)後手(先)よろし
又(先)六五歩の處(先)六五銀ならば(先)五五銀(先)六六歩(先)六四歩(先)七六銀(先)六六角(先)六七歩(先)七八飛(先)にても(先)後手(先)よし(先)此(先)七八飛の時(先)先手(先)五四歩(先)七六飛(先)五五歩(先)同角(先)

同角(先)同歩(先)六五角(先)六六飛(先)六四飛(先)六五飛(先)同飛(先)四七角(先)六六飛(先)五七角(先)六四飛(先)六五歩(先)六一飛(先)五四歩(先)六八銀(先)同金(先)同歩なる(先)同角(先)八八飛(先)八六角(先)七五金(先)同角(先)同歩(先)七三歩(先)八九飛(先)なる(先)七二歩なる(先)六三飛(先)七四銀(先)打(先)九三飛(先)六四歩(先)五五角(先)四五金(先)九九角(先)なる(先)七三と(先)六二歩(先)六三歩なる(先)同歩(先)八三銀(先)なる(先)六六(先)三九銀(先)打(先)五六歩(先)九三金(先)五七歩なる(先)同銀(先)同(先)五五飛(先)四七(先)同金(先)二四香(先)四八角(先)四九角(先)打(先)にて(先)先手(先)よし

十二番 向四間裏止受

四六へ銀を上(先)つて(先)五筋(先)を(先)占(先)める(先)意
(先)三四歩(先)七六歩(先)八四歩(先)六六歩(先)六二銀(先)七八銀(先)五四歩(先)五六歩(先)七四歩(先)七角(先)六四歩(先)六八飛(先)七三桂(先)四八桂(先)五二金(先)右(先)三八五(先)五三銀(先)四八銀(先)四二玉(先)五七銀(先)九四歩(先)九六歩(先)六二飛(先)四六銀(先)八五桂(先)八八角(先)六五歩(先)五五歩(先)四六銀の時(先)三二玉(先)六七銀と(先)指(先)すも(先)よろし

十四番 向四間裏止受

先手四間飛車に廻らす八五歩を突切るときは受け方極妙

先三歩 先七六歩 先八四歩 先六六歩 先六二銀 先七八銀 先五四歩 先五六歩 先七四歩 先七角 先六四歩 先六八飛 先七三桂 先四八玉 先五二金右 先三八玉 先五三銀 先四八銀 先四二玉 先五七銀 先九四歩 先九六歩 先一四歩 先一六歩 先三二玉(辛) 先五八金左 先八五歩 先四六銀にて互格也

變化先三二玉(辛)の時先四六銀先八五歩先五九金左先八四飛先二八玉先四二金上先三八金先四四銀先四九金よるにて後手よろし又先三二玉(辛)の時先四六銀先六二飛先六七銀先六五歩先同歩先七七角なる先同桂先六五桂先同桂先七七桂先六三飛(壬)先六六歩打にては後手悪し此六六歩を止め先一五歩よろし又先六三飛(壬)の時先八二角先六一飛先七三角なるにては後手宜し

十五番 宗看流後手受 (手前先手)

先七六歩 先三四歩 先四八銀 先八四先 先六六歩 先六二銀 先五六歩 先五四歩 先五七銀 先八五歩 先七七角 先五二金右 先七八銀 先七四歩 先六八飛 先四二玉 先三八金 先三二玉 先四八玉 先四二銀 先四六歩 先四四歩 先三六歩 先四三銀 先五八金

十六番 相懸變則一四歩の突き (向先手)

先一四歩 先七六歩 先三四歩 先二六歩 先四八歩 先二五歩 先八五歩 先二四歩 先同歩 先同飛 先八六歩 先同歩 先八七歩 先六六角 先三二金 先七八金 (此時先八六飛宜しからず先二二飛なる先同銀先七五角打の手あり) 又先七八金の時先八六飛ならば先七七金先八五飛先八六歩と指すべし又先七七金の時先八二飛先八六歩先六六角先同歩先二三歩先二八飛にては後手宜し

十七番 相懸四手同金付受 (向先手)

先三四歩 先七六歩 先八四歩 先七八金 先八五歩 先七七角 先五二金右 先八八銀 先四四歩 先二六歩 先三二銀 先四六歩 先三三角 先三六歩 先四二玉 先三七桂 先三一玉 先四八銀 先四三

銀(此四三銀の手にて四三金と上るは悪し)此末二五歩ならば三二玉と指すべし又二五桂ならば二二角引四五歩(此歩は同步と取るがよろし)三二金四四歩同角同角同銀七七角五五角同角同銀七七角六四角二九飛四四歩と指すべし

十八番 平手筑深流 (手前先手)

七六歩三四歩二六歩四四歩四八銀三二銀五六歩五四歩五八金右三三角六八玉四二飛七八玉六二玉五七銀七二玉九六歩九四歩二五歩六二銀三六歩四五歩二六飛(癸)五三銀六六歩
變化(二六飛(癸)の處)二六飛八八角同銀六四角三七角五三銀三五歩
同步一六歩と指す也

十九番 四手目後手方三一金と付て止る駒組

七六歩三四歩二六歩三二金二五歩三三角四八銀二二銀五六歩(イ)

八四歩五五歩八五歩七七角

又五六歩(イ)の處五六歩五四歩五七銀六二銀六六歩六四歩七八銀八四歩七九角八五歩七七銀引六五歩五八金右五二金四六角四四歩三六歩四一玉六八玉五三銀七九玉四五歩六八角五五歩五八金

二十番 (向先手)

三四歩七六歩八四歩六六歩六四歩六八飛(ロ)六二銀七八銀六三銀七七角五四銀五六歩七四歩八四玉五二金右三八玉七三桂四八銀四二玉二八玉三二玉三八金九四歩九六歩一四歩一六歩四五銀五五歩一三角五八飛二二角五四歩同銀七五歩六三金六五歩三三桂七四歩同金

變化(六八飛(ロ)の時)八五歩七七角六五歩七八銀六六歩同飛にて妙也
又六八飛(ロ)の時六五歩同步八八角同銀四五角七七桂八五歩三

六角打にてよろし
以上二十番は初學者のために種々の駒組を示し幾分其可否の戦端をも示したるもので
ありますが將棋は變化多端にして其詳かなる攻守の手段は到底此一冊子に盡し得ま
せんから宜しく本堂發行の將棋全輯に就て順次に研究あらんことを願ひます。

將棋新手ほどき終

昭和三年四月五日印刷

昭和三年四月十日發行

將棋新手ほどき

定價金八拾錢

校閱者 八段 土居市太郎

編纂者 將棋新報社編輯部

代表者 森田市藏

東京市下谷區山伏町三十九番地

發行兼印刷者 森田市藏

東京市下谷區山伏町三十九番地

印刷所 高橋印刷所

東京市京橋區新湊町五丁目一番地



發行所

東京下谷區山伏町卅九番
振替東京四八六三五番

文祥堂書店

東京文祥堂書店發行

◎將棋の上達法は此本に限る

<p>棋聖天野宗歩師原著 八段土居市太郎講解 講義將棋秘法 (駒落の巻) ●定價金壹圓五拾錢 送料金六錢</p>	<p>八段土居市太郎著 ●定價金壹圓 送料金六錢</p>	<p>八段土居市太郎校閱 初習將棋道しるべ 和一 ●定價金七拾五錢 送料金四錢</p>	<p>名人大橋宗英師著 將棋新報社編輯局校解 ●定價金八拾錢 送料金四錢</p>	<p>名人大橋柳雪師著 將棋新報社編輯局校修 ●定價金八拾錢 送料金四錢</p>
(跡定)	(跡定)	(跡定)	(跡定)	(跡定)
<p>先きに土居先生の著述したる「將棋新手法」は先生が熱心なる新研究に依て古人以外の名案良法を披瀝し我棋界を益する事既に少なからざりしが今回更に其奥義秘法を公開して大に棋界に貢獻せんことを決心せられ此に此書を刊行せしなり第一巻全部にて駒落將棋だけ發行せり</p>	<p>將棋定跡書の多き中に現代新研究の定跡を主とし駒組の法則變化の得失實戰の應用等を初心者にも能く了解し得らる、やうに圖解にて親切丁寧な講義説明せる者に六枚落より平手將棋に至る迄各流各種約四十局を羅しあれれば此一書を座右に置いて高段者に就て稽古すると同様の効果上達を得べし</p>	<p>將棋は素人同志で無筋に戦つては幾年たつても有段者にはなれぬ却て下手固りに固つて仕舞ふ故に將棋の上達法は定跡、攻撃、防戦、必死、詰手と夫々本筋の研究が第一である本書は初心者の手引に供した者で定跡以下一切に關しての上達法を親切に教示してある</p>	<p>將棋の定跡書には何れも平手定跡が出て居るが一書の中に二枚以上の各種が載せてあるので平手だけは數局に過ぎぬのである然るに宗英師の相懸集は平手のみで三巻を占め其の研究は詳細精密至れり盡せりである</p>	<p>宗英師の相懸集が古今の珍書であることは既に説明した通りであるが容易に手に入ることが出来ぬ此の奥義は一層得難き珍書である之れは大橋家でも猛將と云はれた柳雪師が更に幾倍も苦心研究した平手定跡の極意極妙である</p>

317

378

東京文祥堂書店發行

名人大橋英宗原著
七段大橋英俊補修
將棋早指南
頭書將棋
絶妙上巻
●定價金八拾錢
送料金四錢
全和一册裝

名人大橋宗桂師著
定跡集將棋早學
頭書將棋珍手選
福島萬兵衛著
●定價金八拾錢
送料金四錢
全和一册裝

名人六代大橋宗桂師著
定跡集將棋妙手
頭書將棋軌範
大橋英俊著
●定價金八拾錢
送料金四錢
全和一册裝

將棋新報社編輯局編
八段土居市太郎校閱
將棋新しほどき
●定價金八拾錢
送料金四錢
全和一册裝

(跡定心初) (跡定) (跡定) (跡定心初)

將棋定跡の研究書は幾種類もあるが其の中で最も早く定跡を覚え上達を計るには此書が一番に適切に出来て居る特に二枚落より平手に至る迄順次に明瞭平易に編纂して如何なる初心者にも將棋全體を了解し得らるゝよう工夫してある

「早學は」將棋定跡書中で最も親切巧妙の者であるが數十年來絶版となり各圖書館にも見られず同好者の渴望して己まの珍本であるが今回漸く一本を得て訂正刊行す頭書の「珍手選」も類本なく六枚落より始まるは宗歩の精選以外には此書のみであつて二本共に今日では金銭づくで手に入らぬ珍書である(一冊で二部の役)

寛政年間將棋物興時代名人の位置を占めただけでも六世宗桂師が斯道の英豪であつた事を知られるが其英豪が一世の研究に依る定跡集で「妙手」の名を存かぬ名拔した百番である共に得がたい珍書を合せて一冊とす其價は蓋し時價十分一であらう

本書は初學者の爲めに將棋の手引に供した者で駒の行道より定跡以下一切に關して上達法を親切に教示し猶ほ局面の分析○勝負の要意○素人好きの指し方○實戰の實例○駒の運用法○入り王の話○黒人と素人の指しぶり○駒組秘訣二十種等種々網羅せり

發行所

東京文祥堂書店

東京市下谷區山伏町三十九番地
振替口座東京四八六三五番

終

